

言葉の散歩道\*

北星学園大学 経済学部

増田辰良

2022年4月30日 NO. 19.

T00418631

札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号

北星学園大学 経済学部

メール・アドレス masuda@hokusei.ac.jp

---

\*このワーキングペーパーは、著者個人の責任において書かれたものであり、北星学園大学は、発行管理のみを行っています。

## 言葉の散歩道

目次

はじめに

言葉の散歩道

はじめに

五十歳の中頃になって、老後のことが気になり始めた。幸い専門の仕事は順調に進んでいた頃である。もう数本論文を海外の専門雑誌に公刊すれば、その仕事に見切りをつけたいと思っていた。じゃあ、雇われ研究者の生活が終わった後、自分はどんな人生をまっとうするのか？ という自問の日々が数年間続いた。何か新しいことを始めるのもよいであろう。がこれまで継続してやってきたことで、かつ自分らしい生業はなにか、それを最後の生きがいとしよう。こんなことを逡巡するうちに、自分の読書癖に気がついた。読了後の図書の内表紙には読了した年月日、場所と短いコメントを記してきた。その内容は当該図書への感想や、その時々心の内を表現したものであった。場所をみると、自宅の書斎、移動中の飛行機のなか、通勤途中のバスの中など様々である。何かを求めて読んだこともあれば、タイトルに魅かれて読んだだけということも多々ある。そして自分の読書は今もって乱読である。さらに心を引かれる言葉や文章には下線を引く癖がある。自分のために読書をし、当該図書を誰か他の人に見せることも差し上げることもなく、ましてや古本屋へ売却などする気持ちもないので、遠慮なく下線を引いてきた。

自腹（高価なの）で図書を購入するのも大変な時代であるが、こんなことを逡巡していた頃、幸い自分が勤務する職場では図書の購入は消耗品として処理され、かつ仕事に必要であればどんな領域の図書も自由に購入し、自分の持ちものにするのができた。この恩恵を最大限に活かして、自分は興味の湧くままに乱買をしてきた。幸か不幸か自宅の書斎、廊下、はたまたトイレにある書棚も満杯になってしまった。

読書によって考える力、生きる勇気を身に付けた方々も多いはずである。それは文章を構成する言葉そのものが生命をもつて生きているからである、と思う。

私が言葉に興味を持ち始めたのは別の体験にもよる。二〇〇七年度の一年間をニュージーランドのクライストチャーチで過ごす機会を得た。当国では先住民族であるマオリの伝統文化が国の至る所で見られた。道路標識、図書館での書誌の紹介は全てマオリ語と英語の併記であった。民族独自のTV放送局（番組）や公的行事において首相がマオリ語でスピーチをしていた。満足とは言わないまでもマオリ民族は十分に尊重されていた。翻って私の住む北海道の先住民族であるアイヌに関してはまだこうした位置づけにない。口承であれ、記述されたものであれ、言葉は民族の証である。このニュージーランドでの体験が私の「生きている言葉、生きる言葉」への関心を深めてさせてくれた。

1. 頑張り過ぎると、人は近づかなくなる

この言葉は二〇〇九年三月十日に大阪のホテルで夕方、TVを観ていたときに耳にしたものである。

このところスロートリーズムという体験観光が流行っている。これは都会人がごくありふれた田舎の民家に滞在し、その家人の日常生活に溶け込みながら心身の疲れを癒すという観光である。家族の一員となって風呂用の薪割りをし、その家庭の夕食作りを手伝うのである。家人が頑張って客人をもてなすと、客人は非日常的な体感ができず、癒しから遠ざける、という意味である。

こんな言葉を田舎の「おばちゃん」がしゃべっていた。そう私も頑張り過ぎて、周りの人を遠ざけているところがあるかもしれないし、同僚の中にもそうした人物がいる。

この言葉には、経営手法がワンマン的な会社では人材が育たない、と言われる理由の一つが集約されている。

頑張りすぎるということは、何かを他人に強制し、他人を遠ざけることになってしまふことを教えてくれた、おばちゃんの生きた言葉である。(二〇〇九年三月十一日)

2. 不安と孤独に一人堪えよ

この言葉は国のリーダーに投げかけられた言葉である。現代人の心にこの言葉はどう響くのであろうか。アメリカ発の世界不況の真只中で、派遣切りの増加、経済格差の拡大、自殺者の急増など社会不安が増幅している。有効な景気浮揚策がない中で国のリーダーは国民の生活の質を高め、量を維持するために意思決定を迫られている。

酒を介した密談や占師に頼るのも人情であろう。しかし、国の舵取りを任せられた者であればこそ不安と孤独に一人堪えよ、堪える精神力を持って、というのがこの言葉の真意である。そのためマンガ喫茶へ閉じこもるのもいいだろう。

ワイワイガヤガヤとした雰囲気からは「今」を超越した判断などできない。一人不安と孤独に堪えてこそ真実にめぐり合えるということである。

大変な時局に直面するときこそ孤独に一人古典と格闘するくらいの精神力をもつことによつて目先の利害を超えた基準でもって判断を下せる。そうした精神力を持つリーダーの出現が望まれている時代である。(二〇〇九年三月二日)

参考文献。竹内洋「私の視点」『朝日新聞』二〇〇九年三月三日。

3. 共鳴しあう苦悩への「こだわり」

いじめ、失職、その他の人生の苦難や挫折に直面して、自ら命を絶つ人がある。そんな中にも何かに救われ、命をつなぐ人たちもいる。

昨夜、尾崎豊の歌に生きる勇気をもたらしている人たちのテレビ番組を観た。尾崎の作品は自分という一人称が苦悩する主人公を歌うものが多い。そんな尾崎の苦悩に共鳴し、尾崎に「こだわり」生きている人たちである。

生き抜くために「こだわり」を持つ人たちの強さを知った。苦悩への「こだわり」が共鳴しあ

っているようである。

でも、二六歳になるまで苦悩に「こだわり」続けた尾崎の苦悩の源は分からない。(二〇一一年三月二十日)

#### 4. 収益金を震災の復興資金へ

二〇一一年年三月十一日(金)に発生した東日本大震災(東北関東大地震)は様々なところに影響を与えている。

その一つがプロ野球の開幕日である。被災者たちのことを思うと、野球どころの話ではない。東京電力福島第一原発も被災にあり、回復不可能な状態にある。燃料不足、電力不足ということ関東では計画停電も実施されている。パリーグは早々と四月一二日へと延期を発表した。仙台をフランチャイズとする、楽天イーグルスにも配慮したのであろう。

一方、セリーグは予定どおり、三月二十九日に開幕する。この期日が物議をかもしている。パリーグの日程にあわせて延期できないのか、節電に協力するということからナイト・ゲームの数を減らす、実施しないなど、文部科学省からも要請を受けているようだ。

私は、セリーグの決定についてはさほど反論はない。予定どおり、開幕すればいいと思う。ただし、ナイト・ゲームについて、文科省の要請に従うべきだろう。でないと、民意が許してくれないように思う。いまやプロ野球は国民的な文化財的な興行となっているのだから。

さらに言いたいことは、セリーグがパリーグの開幕日までの試合から得た収益金は必要な経費を除いて、震災の復興資金として、寄付するべきではないか。社会貢献への代償としてプレーする意義は大きいと思う。(二〇一一年三月二十一日)

#### 5. 老人と子犬

近所に子犬を飼う老夫婦がいる。数年前より、飼い始めたようだ。世間ではペットが老人の心を癒すというわけで流行っているようである。この子犬、ご主人様の買い物に付き合っ散歩をさせてもらっている。

家の中から往来へ出た子犬はうれしくてキャンキャン、運動不足やストレスを解消したいのであろう、全速力で道路を駆け抜けたいのであろう。がしかし、ご主人様はご老人である。一緒に駆けてくれない。前足で立ち上がり子犬はキャンキャンと吠えながら進んでいく。まるでサーカスのワンワンショーを観ているようだ。

「犬の心、老人知らず」である。私にはまるで子犬が虐待を受けているようにしか見えない。きつといつかこの子犬はご主人様を力任せに引き倒したいと思っっているかもしれない。その日のために後ろ足のみでリードを引っ張り、足腰を鍛えているのかもしれない。

しかし、その思いを遂げるにはあまりにも小さすぎる子犬である。老人はうまく選択したものである。キャンキャンを聞くとたびに子犬の哀れと老人の英知を思う。(二〇一一年七月十三日)

#### 6. 内向き志向からガラパゴス化へ

昨年来、日本の若者たちの「内向き志向」が喧伝されている。その典型は海外への留学生数の減少に現れているようだ。これに派生して、ハングリー精神や克己心の欠如、現状を肯定する保守的人生観にまで言及されている。

しかし内向き志向を狭い社会での生き方だと理解すると、これにもクリエイティブな側面が多々ある。研究に限れば本来、重箱の隅を突つくような基礎研究なるものは内向き志向でなければできないこともある。

内向き志向からの成果がガラパゴス化（独自の進化した生態系）するものもある。たとえば、鎖国が貫かれた江戸時代に創造された浮世絵などは世界に誇れる文化的成果物である。

大切なことは内向き志向の姿勢で、クリエイティブな思考をし、具体的に何を創造するのか、ということであろう。

いま、問われているのは、克己心に裏打ちされた、このクリエイティブな思考をしようとする若い若者が増えていることである。

新しい技術、芸術や思想は内向き志向に発し、ガラパゴス化したものが多い。このガラパゴス化したものを世界へ発信する姿勢を養うことは「外向き志向」へとつながるであろう。(二〇一一年一月三日)

## 7. リスクの選好性

中学生のとき、私は野球少年でした。キャッチボールは相手の胸をめがけて投げることに、打球は一步前に出て、体の正面で捕球するよう指導されました。捕球できないと早く動け！ と怒鳴られたものです。

守備位置によって使うグローブも動作も異なりますが、内野守備をとりあげましょう。体を打球の正面へ移動させる動作に大変な努力をしました。これはイレギュラした打球を体の一部に当たって後逸することを防ぐための動作です。こうした指導方法は日本的であると言われることがありました。一方、アメリカでは体の横で捕球する逆シングルキャッチの動作が指導されます。もちろん捕球し損なえば、塁上にランナーが残ります。

日本のプロ野球選手がアメリカの球団へ移籍し、この逆シングルキャッチを最初に練習している光景がTVなどで放映されたこともありました。

この動作の指導方法は、ある面において国民性の違いを反映しています。後逸を恐れて、打球の正面へ体を移動させるリスク回避的な国民性と後逸を恐れず、果敢にリスクを愛好する国民性です。

捕球から送球までの動作はアメリカの方が流麗にみえます。打球に早く追いつけば、体の正面で捕球すべきでしょう、そうでなければ逆シングルで捕球すべきでしょう。

正面で捕球するか、逆シングルで捕球するか、どちらも体の無駄な動きを省き効率的なフットワークをすることが次の動作に繋がります。

無難にみえるプレー、流麗にみえるプレーも体得するには努力が必要です。いずれの国にも共通していることは打球に対してスプリット・ステップし、一步前へ出て捕球するという基本動作です。要するに、しっかりと準備をするということに変わりはないのです。(二〇一一年一月十二日)

## 8. 真似のできない文章表現

島尾敏雄の作品「水郷へ」の中に真似のできない文章がある。交通信号機が発する歩行者への注意を促す鳥の鳴き声の警笛を表現したものです。

「……そのやや哀切なひびきが風と快い気温の中に吹きちぎれ、さえぎるもののないいたいらな空

に吸いこまれ行く様子が、文明と原初のあわいに立ち会うようで、甚だ浮き世離れのした思いに誘われた……。」(一二三九頁)

もちろん、作家がこうした文章表現をするときの背景にある心模様は理解されるべきである。がそれにしても、警笛の音響を「……吹きちぎれ」「……さえぎるもののないいたいらな空に吸いこまれ」「……文明と原初のあわい」と表現できる感性はどこからくるのか。

この作品の執筆年代は知らないが、いまも聞いているあの警笛(♪トオリヤンセ、トオリヤンセ、ココハドノ…)であれば、「……哀切なひびき」には同感できる。

こうした文章は下書きの段階で完成しているのか、推敲の段階で挿入したものなのか、凡人にはそんな関心しか湧かないのであるが。(二〇一二年三月九日、金曜日)

参考文献。島尾敏雄(二〇一〇)「水郷へ」『夢屑』講談社学術文庫、一二七〜一四七頁所収。

## 9. 巢立ち

わが家では数年前から、土曜・日曜日の食器洗いは男の任務となっている。水に触れる機会が多い妻の指先が冬季の乾燥でひび割れし、痛い思いをしているからである。啓人(次男)の心優しい気遣いから始まり、彼の指揮のもとに、この任務は絶対的なものとなっている。

夕食後の担当は私である。毎回、ご飯茶碗四個、みそ汁碗四個、はし八本などを必ず洗う。夕食後、洗いながら思った。幼児用の碗、はしから大人用にかわったのはいつからだっただろうか。来月からは、これらが三個、六本になる。愛しい理人(長男)が東京の大学へ進学し、この家を出るからである。数年後には、二個、四本になるのだろう。こうして子供たちは巣立っていく。

成長の証をみるのは嬉しい反面、心寂しい想いも味わっている。各人各様の弥生三月中旬の頃である。(二〇一二年三月十八日、日曜日)

## 10. 雪割り、根明きの季節

この冬は例年よりも降雪が多く、今も道路の端っこには一メートルほどの積雪が残っている。

これをスコップ、鶴嘴(つるはし)で崩し、陽当たりのよい路面へ出す作業の音が聞こえる。

雪割りである。放っておいてもすべて溶けてしまうのであるが、早く黒土をみたいのである。早く春を体感したいのである。

今年、鶴嘴のコンコンという音がなにかを急かしているように聞こえる。木の根っこ周辺にも空間ができています。木の温もりで樹皮に触れている雪から溶けているのである。これは「雪根開ゆきねびら

き」「根明あ(開)き」である。希望の扉が開いたように見える。

春はこれらの季語とともにやってくる。明日、愛しい長男が上京する。季節は待ってくれない。

さあ「夢へ」「未知の世界」へ向かって羽ばたこう。(二〇一二年三月二十九日、木曜日)

## 11. 鼻水の季節

今年も花粉症の季節がやってきた。この症状と付き合い始めてから、十六年以上の時間が過ぎ

た。この症状はイギリスへ留学中に始まった。当初は、カーペットの埃が原因かな、と思っていたが、帰国した翌年から、この症状に悩まされてきた。

わが家にあるリンゴの花が咲く頃に庭仕事をすると、必ず鼻水が出始める。二度目の留学先であったニュージージーランドでは、誰からも賞賛される庭園にそっぽを向けていた。薔薇や桜、芝生の新芽にもずい分と悩まされた。

何やら怪しい薬もあるようであるが、薬効のほどは知らない。試す気持ちはさらさらない。

この季節、あきらめて、ただただ鼻をかんでいる。新緑がきれいな季節ではあるが、早く過ぎ去って欲しい季節でもある。(二〇二二年六月三日、日曜日)

## 12. 小雨の降る土曜日

私は小雨の降る土曜日が好きだ。買い置きしておいた文庫本を書棚から取り出し終日、読むのである。読む本によれば、晴天でもかまわない。でも時間をかけて文章の極意を噛みしめながら読むときは、やはり小雨が降っていることが欠かせない。心身とも静謐な状態を保てるから。

岡本かの子著『食魔』を読んだ。食(料理かな)をめぐる人間模様を著したものである。解説を読む限り、背景には仏教思想があるようだ。本文からはこうした思想は読み取れない。いや読み取る力が私にないだけであろう。

お袋の味と芸術としての料理との違いを次のように表現している。

「味と芸術の違いは(いたわ)りがあると、無いとの相違でしょうかしら」

もちろん、お袋の味に(いたわ)りがある、と考えたい。(二〇二二年五月二十一日)

## 13. 朝食の時

私は、今、自分の文体・表現法を探している。探す方法として、多様なジャンルの読書をしている。勤務のあるウィーク・デーには十分な読書時間がとれない。たいてい金曜日の夜、あるいは土曜日の朝から読み始める。一夜、一日で読了できず、翌日に持ち越すこともある。その翌日の朝食時にはうわの空で家族の会話を耳にしているようだ。

なごやかな団欒の中で、私に振られた話題で、妻は一言「お父さんは聞いてないから!」

今朝、この言葉の餌食になったのは『卵をめぐる祖父の戦争』でした。小さなアイデアを多くの史実と独特な表現法でもって膨らませた作品です。

すまん、早く食べて、残りのページを読みたいのよ! (二〇二二年七月二十二日、日曜日)

## 14. この本に自分のことが書いてある

なんて素晴らしい幸福な勘違いであろうか。これは先月、直木賞を受賞した辻村深月さんの言葉である。多様な人生経験をし、また無数の読書をしてきた人であれば、自分が主人公だと勘違いする小説にも巡り会うようだ。がしかし、彼女は三十二歳である。

凡人は自分を探すために読み、鼓舞するために本を手にする。四十五年ほど前に姉(御所小学校の山本嘉子先生だったかもしれない)に紹介されて読んだ『路傍の石』を再読した。感受性の豊かだったあの頃、自分もこう生きようと決心させてくれた小説である。

この生き方を選ばせてくれた親父とお袋にはいくら感謝しても足りない。振り返ると、私にもすばらしい幸福な勘違いがあつて、今がある、と想う。(二〇二二年八月八日、水曜日)

## 15. 空気のようなもの

長年、連れ添ってきた夫婦は互いの関係性を空気のようなもの、と表現することがある。そばに有つてもそのありがたみを感じないが、無いと生きてはいけないうれしいもの……という例えであろう。交換価値はなくても使用価値はある、ということである。

自転車のタイヤも夫婦になぞらえることができる。前後輪、いずれがパンクしても自転車の用をなさない。多少、不十分な空気圧であつても、デコボコ道も走ることができる。夫婦のみであれば自転車、四大家族であれば自動車、社会であれば連結された列車になるのである。

意識していないものに、何ものにも代えがたい価値があるということである。皆で繋がっているということである。(二〇二二年八月一日、土曜日)

参考文献。森浩美(二〇二二)「車輪の空気」『家族の分け前』双葉社、二五二〜二八三頁所収。

## 16. おじやまなアナウンス

子どもの頃と違って、普段、歌謡曲を聴く機会がない。唯一、まとまった時間をとって聴けるのは飛行機のなかでイヤホンを通してである。

なぜか若い頃の聴き知った歌(ナツメロ)が流れてくると、郷愁とともに、「よし、もつと頑張るぞ」という私なりの勇気が湧いてくる。ときにうつすらと涙することもある。機上での、そんな時間が大好きである。

でも、この心地よい想いをさえぎるものがある。キャビン・アテンダントによる、「当機はただいま能登半島の上空を通過しております」というアナウンスである。この間、イヤホンの音は中断される。何ておじやまなアナウンスであることか、といつも興ざめさせられている。(二〇二二年八月二十日、月曜日。郷里からの岐路に想う。)

## 17. ある珍事

人間ドックに入る前の木曜日。帰宅してみると、玄関フードの階段にメジロが横たわっていた。こんな至近距離でメジロを見るのは子供の頃以来である。

きつとフードの透明ガラスに嘴から直撃したのであろう。気絶をしているのかと思いきや、すでにご臨終の状態であった。忌々しい蟻んこも数匹、うろついていた。酷暑の日だったので、捨て置いて、まず部屋で麦茶を飲みアイスクリームを食べて一服してから、片付けた。畑の端に恭しく埋葬した。

この季節にメジロである。帰宅した息子に、この一件を話した。「何かあるかもしれないよ。注意するといよいよ」と、微笑ながらアドバイスをしてくれた。翌日は人間ドックに入る予定であった。が例年どおり、何事もなく、すんだ。旦那が入院中の姉からも何の連絡もない。

とかく考え過ぎにされがちな珍事であった。(二〇二二年八月二十六日、日曜日)

付記。その後、しばしば、メジロの鳴き声が聞こえる。私は、メジロの夫婦は一生を添い遂げる仲なのかどうかについて確かな知識をもっていない。妻が言うには、夫か妻を亡くしたメジロが相手を探して、泣いているのじゃないのかと。その泣き声か。亡がらを見るまでは死を受け入れられないのかな。日本人的な死生観である。

亡がらは畑の端にあるモミジの根っこ近くに埋葬したのだが。墓標を立てるわけにもいかず……。

近所に林があるとはいえ、この季節にメジロが住宅街を飛んでいるというのも、不可思議なことに思える。(二〇二二年九月二十一日、土曜日)

## 18. ど根性ダイコン

およそ人が種を蒔いたのではなく、どこから風に乗って不時着した種であろう、石垣やアスファルトの割れ目から芽を出し、凛々しい御足と葉っぱをつけたダイコンを、人は「ど根性」ダイコンと称している。

人の手を借りず、世間の風雨に曝されながらも、それを糧として生長したものである。なまじつか人の手をかけられたものよりも生き様は立派である。

さて、わが家の前と裏の畑には、同じDNAをもつダイコンが育っている。距離と目線の関係上、前庭には頻繁に水をやっている。裏庭のものは天然の雨と太陽の恵みのみを頼りに生長している。どうも裏庭に軍配が上がりそうな育ち方である。(二〇二二年八月二十六日、日曜日)

## 19. 葉雨・葉波

残暑の厳しい午後過ぎ、窓を開け放し、畳にごろんとなる。畳の心地よい感触と暑さのせい、睡眠に身を任せてしまう。夢の中でザー、ザー、ザーという擬音が聴こえる。夜中の静寂なときに降る雨音に似ている。海波の音にも似ている。「雨？」と独り言が洩れる。これは雨でも波でもなく、ほうの木の葉が風で擦り合う葉音である。この風が顔に当たれば、何とも涼しかるうに。ただただ暑い。(二〇二二年八月三十日、木曜日)

## 20. 用心がいいの？、悪いの？

私は、消耗品を買い置きする癖がある。仕事から、頻繁に使う「赤」のボールペンを二〜三本、余分に買ってしまふ。確かに、それほど使う機会は多いのであるが。

幾つか持っているバッグの内側に挿してある。出張用で、たまにしか使わないバッグのボールペンはほとんど使われない。

チューブのノック頭の所まで「赤い液」が残っていても、先ちよのボールが回らないのか、液が固くなったのか、ペンは用をなさなくなり、捨ててしまう。

どうも、この癖は、用心がいいのやら、悪いのやら、分からない。

付記。父母懇談会会場、旭川グランドホテルのロビーにて。バッグに同行したペンはクズとなり、懇談のメモをとるため、フロントに借りたしだいである。(二〇二二年九月一日、土曜日)

## 21. 豪雨とカラス

思いもよらない、猛り狂った雨である。風も無く、ただひたすら曇空からゴォーゴォー、ザーザーと音を立てて降りしきっている。窓に当たる雨は大滝のように流れている。車もライトを点けている。

感傷に誘われて、窓外をみると、近隣の屋根のTVアンテナに一羽のカラスが留っている。この恐怖をそそる雨の中、すでに三時間以上も身じろぎもせず、じっと前を向いたままである。こ

の豪雨である。林を目指して飛び立つこともできないのか。そもそもこの雨にカラスの羽は耐え得るのであるうか。おやカーカー、と聞こえたぞ。恐怖の叫び声なのか、この災難を仲間に伝えているのだろうか。

またカーカー。見ると、姿を消した。わずかな少雨時をとらえ林へ逃げおさせたのだろうか。「ああ、怖かったよう」という泣き声だったのかな。空も明るくなってきた。(二〇一二年九月九日、日曜日)

## 22. 「音」再考

人という動物は、イライラと情緒不安定になると、なぜか音を出したがるようだ。何か物を投げたり、たたき壊したり、大声をあげたり……。音を出すことによつて、心の平衡が保てるのである。ちょうど、感動したときや、とてもとても悲しいときに涙を流すことによつて、興奮を鎮めるように。

そういえば何かに興奮したとき、他の生き物も音を出している。求愛の鳴き声、敵への威嚇の声、緊急事態を仲間知らせるための咆哮などがある。体色を変えるものもいる。これらははるかに穏やかで人畜無害で、かつ観る者の目を楽しませてくれることもある。

静寂な夜に、妻の閉めるドアの音がバタ〜ン、バタ〜ンと鼓膜に響いてくる。退散！退散！退散して秩序を保つのも賢い技である。(二〇一二年九月十六日、日曜日)

## 23. がらくたと宝物

どこの家庭の納戸も悲しい位置づけにある。ほとんどの生活不用品は、しばし持主の感傷を呼び起こす役割をするために、すぐにはゴミと命名されない。とりあえずこの空間へ投げ込まれる運命にある。とりあえず、である。

「ああ、これは……ときに読んだ絵本だ。これは……に買ってもらったものだ。……からもらったものだ。……年生のときに作った工作だ。懐かしい。捨てないで！」

この家を建てて二十年になる。初めて納戸の片付けをした。夏場のみドアを開放しているが、物品が乱雑に置かれているのが目に付き、ずっと気にかかっていたのだ。

透視しなくても確認できるものは、子供部屋用の掃除機、子供たちの絵本、童話、オモチャ、私の数冊の本とファイル、海外に滞在したときに買ったデイバック、前の職場の教え子からもらった時計、扇風機と大型の旅行用スーツケース、テーブル、クリスマスツリー、鯉のぼりの入った箱などである。私のものについては、どの品についても思い出を語りた衝動にかられるが、でもここでは止そう。

パラパラと絵本を開くと、「わからない漢字はぼくにまかせなさい」と印刷された名刺が出てきた。これは理人(長男)が小学生のころに学校で作ったものだ。確かに、彼は漢字が得意だったなあ。

子供たちの自由帳も出てきた。しばし読んでみる。なかなかのいい創作文である。想像力も豊かだ。とくに啓人(次男)は絵もうまかったし、お話を文章にすることも上手だったなあ。コピー用紙を手帳サイズにして、漫画も描いていた。これらは将来、結婚式の余興に「新郎が子供の頃……」と情報提供するとウケルかもね。

おさるのジョージ、ピータラビット、英語の小冊子もあるぞ。これらは妻のものだ。

絵本、童話をできる限りジャンル分けし、ビニールヒモで縛った。童話の中には幼児向け雑誌

の付録もあり、かなり大部である。かがくのとも、ポケモン、機関車トーマス、ドラえもん、四字熟語事典などなど。

透視できないダンボール箱には何が閉じ込められているのかな。何やら文章をしたためた便箋もあるが、拝見するのはやめよう。おっと！これは妻のお花の師範免状である。こんなところに放置しておいていいのか。重そうな箱を開けると、使わなくなった鍋、皿、椀が入っていた。重いはずだ。さらに大部のタオルケットの入った衣装ケースもあった。

何やらオレンジ色の器械も出てきた。これは何だ！わからん！わからん！

どれもこれもゴミになることを後回しにされたものばかりである。書物はまだ読む機会もあるう。それにしても鍋、皿、椀、タオルケット、ここにあつて値打ちを保てるのか？（二〇一二年九月十六日、日曜日）

## 24. 臍の緒

子供の頃、お袋に自分や姉兄の「臍の緒」を何度か見せられた。桐の小箱に入っていた。しなびた茶色い小さな草か木の根つこのようであつた。お袋は自分と子供達は繋がっていた、いる、ということを理解させたかつたのかもしれない。

生意気な口答えをしたときには、腹に据えかねたのであろう「生んだときに、踏み潰しておけばよかった」と、愚痴を超える恨み節を聞かされた。子供たちを真剣に睨けたかつたのであろう。それが適わないのだから、自分で産んだ子を踏み潰しておけばよかった、という思いにかられたのであろう。

母親は、二度「臍の緒」を切る覚悟をするそうだ。一度目は出産時自分の体から胎児を切り離し人として迎えるためであり、二度目は子離れ時だそうである。

近頃は、二度目の「臍の緒」が切れない母親が増えているそうだ。母親は強すぎるくらいの本能で子供を抱きしめることに加えて、冷たすぎるほどの本能で突き放すことに目覚めないと、ひ弱な子たちのままで生長しない、と思う。

「臍の緒」を再び切るような思いをさせられる瞬間が母親にも必要である、ということか。（二〇一二年九月十九日、水曜日。『天声人語』をヒントにした。）

## 25. アホと煙は高いところへ昇る

どこの誰が言い始めたのかは知らないが、「アホと煙は高いところへ昇る」。私も、足がすくむようで、必ずしも高い所は好きではないが、そこに立って眺める景色は好きである。

高い所は山の頂上ではなく、機上でも、二階にあるこの部屋でもよい。窓から景色を見ていると、何かができそうに思え、勇気が湧いてくる。精神が抑圧されているわけではないが、とにかく無限の可能性が開けてくるように感じさせてくれる。

この空の向こうを見てみたい。もつと高いところがあるはずだ。そしてそこへ行けるかもしれない。できないこともできるようなチャレンジ精神がチャージされるのだ。不可能の反対語は「挑戦です」なんて強気な言葉も浮かぶ。

こんな狭い世界で生きたくない。自分には、そういう潜在的な気持ちが強くなることを認めた。い。（二〇一二年九月二十一日、土曜日）

## 26. 自分の顔に責任を持つ

私は、ときどき自分の人相を不幸に思うときがある。そもそも人相とは自分が作り上げたもので、育ててくれた親や他人の責任には帰属しない。人間、「自分の顔に責任を持つ」とはよく言ったものだ。顔ではなくて、表情だと言い換えるべきだと思うのだが。

人相を不幸に思うといっても、場面と心理状態による。何かを熟考中にもう一つの行動をとると、いわゆる挙動不審者のように見られるのである。例えば、仕事、もちろん研究論文が頭蓋骨内の全体を覆っているときに、入用な文房具が不足しているとしよう。当然、店へ買いに走るようになる。急かされた余裕のない雰囲気を確認していることだろう。目は購入すべき獲物へ一点集中である。そんなときの私の表情は何かを盗み取る魂胆で動いている獣のような形相になっているのだと思う。レジの暇な店員が私の近隣に来て、何やら意味の無い在庫点検や品物の片付けをするのである。

二つの獲物が近くにあれば、挙動不審「的」にもならないが、離れた場所にあると、大きく空間移動せざるを得ない。このA地点からB地点への移動も怪しまれるのである。こうした迷惑を受けるのは、この時代になっても防犯ブザーを設置していない店である。

名譽にかけて誓い、断言しておきますが、何もやましいことはいたしておりません。それが証拠に出入口に鎮座する相当に優秀でかつ高価であろう防犯ブザーを一度なりとも鳴らした経験はございません。本当の悪人はもつと別のところで、かつ狡猾に悪事を働いているものだと思います。

こんな顔のおっさんでも赤ん坊はあやすと私の優しい心根を正しく見抜いて、ケロケロ笑ってくれますから。でも、もう余裕をもつて振舞うことを意識すべき年齢なのだろう。この点は反省すべきかな。(二〇二二年十月二十一日、日曜日)

## 27. 同窓会名簿

およそ四十年前前に卒業した高等学校の同窓会事務局から、同窓会名簿の作成とその購入を勧誘する封書が届いた。私は昭和四十九年卒業である。封書の中に住所不明者の名前が記されており、知っている方は同封された葉書きで連絡先を教えて欲しいという、協力を要請する文書も入っていた。

そこに記された名前の中には男性であれば、はっきりと当時の顔が浮かぶ同窓生もいる。女性については旧姓も記されており、その段階では住所や連絡先も確認できたのである。こちらにも旧姓をみると、はっきりと顔が浮かぶ方々もいる。例えば、「彼女は成績も良く、両親が教員をされていたので、きつと本人も立派な大学を卒業して、立派な男性と結婚されたことだろう」と想像をしてしまう。そんな中に旧姓のままの女性を見つけた。短い期間ではあるが、恋心を抱いていた同窓生である。さつそうと自転車をこぐ彼女の姿が噂の裏に浮かぶ。不思議なもので鮮明に浮かぶのである。最新のデータがいつ作成されたのかは知らないが、まさかこの歳になるまで独身でないことはないだろう、と変に心配してしまう。

仕事ながら、データの内訳が気にかかる。不明者総数三十二名のうち、男性七名、他二十五名は女性である。女性は結婚して住む場所が変わるのである。自ずと不明者の数が増えるのも納得できる。女性のうち、旧姓のままの方は四名である。実に少数派である。

卒業をしてから数回、同窓会を開催するという案内文をもらったことがある。でも遠方に住んでいることから私は一度も出席したことはない。中学の同窓会も同じく出席する機会をもったことがない。幸い、田舎の近所には高等学校までクラスメイトであった同窓生がおり、実家の農家

の後を継いで健在である。昨年、母の法事で帰省した際、あいさつをしに訪問させてもらった。頭髪は白くなっているが人相は昔のまままで面影も残っており、懐かしく昔話をした。ともに歳をとったことを認識しあった。

この同窓会名簿、卒業生全員を含むものである。先輩になる私のおばさん、後輩のいとこも載ることになる。なぜか職業欄や勤務先にどんな名称が並んでいるのか、興味が湧いてきた。落ちこぼれであった私のような者と同じ生業に就いている同窓生たちもいることだろう。もう故人になってしまった同窓生もいるかもしれない。

こんなことを想う私も歳を重ねて、優しくなり過ぎてきたかな。(二〇一二年十月二十三日、火曜日)

## 28. 落語のおしえ

落語に「刻そば」という演題がある。これは知識をぎつしり頭に詰め込んでそれを記憶しているだけの人は、自分で考えることができぬ、という教訓に富む古典落語である。

この落語は前夜、うまく勘定をごまかした他人のことを真似して、アホがスカタンをこく斬である。

《いよいよ食べ終わって、このアホが言います。よう親仁、勘定はいくらだ。

へい、十六文となります。

あいにく細かい銭しか持つちやいなんだ。落とすといけねえやあ、手を出してくれい。

一(ひい)、二(ふう)、三(みい)、四(よお)、五(い)、六(むう)、七(なな)、八(やあ)。

よお親仁、いま何時だい。

へい四(よ)つ時で。

五(いつ)、六(むう)、七(なな)、八(やあ)、九(この)、十(とう) …。

このアホ三文損をしました。お後がよろしいようで。》

うまく勘定をごまかした人は、支払い時刻をしつかり確認してから、……八(やあ)と数えたところで、《よお親仁、いま何時だい。》《へい九(この)つ時で》と言わせてから、十(とお)……と払って、一文得をするというのが話の落ちである。

単純に、アホがスカタンする滑稽話とみるのではなく、前例に従順ではアカン、なんでもマニュアル通りに行動すると、とんでもない大損をするので、臨機応変に考え行動しなければいけないよ、と戒めた落語である、と聴くべきであろう。

それにしても、このスカタンという言葉になんともアホの滑稽さがにじみ出ている。言葉の妙だねえ。なお、夜四つ時は現在の午後十時頃、暁九つは午前〇時頃にあたります。(二〇一二年十月二十七日、土曜日)

(筆者) 左記の文章のオリジナルとヒントの出所。

落語のおしえ

「……子供のころから……落語を聴いて育ち……マニュアル通りでは生きていけない……。前例主義ではアカン、その都度判断しないと、と思うようになりました。」『朝日新聞』朝刊(二〇一

二年十月二十二日、月曜日（タレント 松尾貴史の言葉より）

落語に「時うどん」という演題がある。前夜、うまく勘定をごまかした他人のことをまねして、アホがスカタンこく話である。

《いよいよ食べ終わって、このアホが言います。よう親仁、勘定はいくらだ。  
へい、十文となります。

あいにく銭は細かいんだ。手を出してくれい。

一（ひい）、二（ふう）、三（みい）、四（よお）、五（いつ）、六（むう）、七（なな）。

よお親仁、いま何時だい。

へい四（よ）つ時で。

五（いつ）、六（むう）、七（なな）、八（やつ）、九（くう）、十（じゅう）。

このアホ三文損をしました。お後がよろしいようで。》

注。うまく勘定をごまかした人は、支払い時刻をしつかり確認してから、八つ時に席を立ち、《よお親仁、いま何時だい。》《へい八（やつ）時で》と言わせてから、九（くう）、十（じゅう）と払って、一文得をするというのが噺の種である。

単純に、アホがスカタンする滑稽噺とみるのではなく、前例に従順ではアカン、なんでもマニュアル通りに行動すると、とんでもない大損をするので、臨機応変に考え行動しなければいけないよ、という戒めの落語である、と聴くべきであろう。

それにしても、このスカタンという言葉になんともアホの滑稽さがにじみ出ている。隠し味のような言葉だねえ。（二〇二二年十月二十七日、土曜日）

「知識をぎつしり頭につめこんでそれを記憶している人は、自分で考えることができぬということとは或る意味会いでは真理である。」（九十三頁）

参考文献。北杜夫（二〇二二）「私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか」『私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか』実業之日本社、二十九〜一三三頁所収。

## 29. 本の嫁ぎ先

私は、この十二月で満五十七歳になる。正式な退職まで七年を残すのみとなった。正確には、その後五年間勤務できるので、組織から完全に離れるのは七十歳である。したがって、まだ十二年ほど働けるわけであるが。

仕事も自分なりに評価すると順調である。英文雑誌への掲載論文も予定どおり累積しているし、和文の論文も他の研究者が先行研究として利用してくれるものが数編ある。もちろん、このまま専門分野で社会に貢献し続けるつもりであるが、興味や関心は退職後の精神生活に移っている。将来、随筆のようなものを手がけたいと考えている。私小説よりもっと書けそうなのが随筆なのである。この計画を実現すべく、これまで読んだことのない、いや名前も知らなかった作家の作品を読んで、自分が創造できないような文章表現をノートしている。専門書を読んでもおおよそ情緒的な文章には出会わないからである。

また退職後はこれらの専門書たちを手取ることもなからう。これらを残しても子供達には読んでもらえそうにないし、書棚のスペースも狭くなってきたので、二度と手に取らないであらう、

そうした本たちを大学の研究室へ運び、山積みにしてある。いずれ決心を固めて、資源として回収してもらう予定であった。

先日、札幌市内の商売熱心な古書店主が研究室へやって来て、山積みになっている本たちを見て、多少の書き込みがあつてもすべて引き取ってくれると言う。さすがは古書店主である、資源回収の日に本が道端に積まれているのを見たり、ゴミ収集車の大口へ投げ込まれるのを見ると、忍びがたいと言っていた。私など道端に積まれていると、つい救助の手を差しのべ、連れて帰りたくなる衝動にかられる。ましてやそうした本が雨に打たれているのを見ると、涙が出そうになるくらい悲しくなってしまう。

それらを廃棄した持主の玄関先へ移動させてあげたい衝動にかられることもある。そして、その住人に本を邪険に扱ってはダメ！と言言小言を聞かせたくなる。

その日、店主は他の研究室に頼まれて本を整理し持ち帰る準備をしていたそうである。確かに、私の本の山を見れば、店主にとつて、懐かしい本ばかりであろう、さつそく値踏みをしたのである。絶版物が多く、図書館の閉架書庫にしか入れられないようなものたちである。店主宅に嫁がせても、この本たちが再び誰かの手で暖められる日はないかもしれない。単なる古古書として、いや嫁(い)かず後家として、店主の棚にパラサイトし続けるだけだと思う。

私は、退職時に思い切つて全て手放すつもりだが、まだ愛着があつて本たちと同居している旨を熱く語り伝えた。店主はいつでも来て片付けてくれると言ひ、名刺交換もして帰つた。これで私の本たちは将来第二の嫁ぎ先が決まつたという思いがした。子供たちには文学書と文庫・新書の類を残してやろうと思つている。幸い次男坊は読書が好きなので、彼には加齢とともに読めそうなものばかりである。

研究室へ運んだため、この書齋に残つた本たちは私が学部・大学院生時代に、努力するために買い、読み、悩んだ愛着のあるもののみが残つた。原点が残つたということかな。研究生活も意外と単純な結末を迎えるように思える。まるで正宗白鳥『寂寞』の主人公のようだ。(二〇一二年十月二十八日、日曜日)

### 30. ドアの表情

この創作文に登場するドアは実在します、あるいは実在しました。該当する部屋の方々への私の特別な感情は一切ありません。ドアに興味があるのみです。あしからず。

大学の教員たちの個性も没化したと言われるが、彼らの研究室のドアの表情にはまだまだ独特な個性が残っている。かくいう私のドアには英文のメッセージがマグネットで止められている。留守時に用件等のメモをポストへ投函するように促す文面である。マグネットはニュージランドでの留学の土産として買ったキウイを模つたものである。こうした張り紙はごく一般的にどのドアにも見られる。

このドアを見ると、なかの住人の専門領域や人柄が容易に想像できるから面白い。私が独居しているフロアは法学と社会福祉学を専門とする教員たちで占められている。幾つか紹介しよう。さすがに律儀な法学専門の教員である、彼のドアには学生への躰の一環としてアポイントをとる方法が記されている。ノックは軽く二回する。入室時には氏名・所属・面会の可能性をたずねるなど。この一連の動作を通じて学生は立派なサラリーマンへの道を突き進むことになるのだろう。そういうえば、彼は就職支援委員であつた。職責を普段から果たしているのかな。

ご自分の一週間の担当科目とその時間割表を貼っているドアもある。用件があれば空時間にアポイントをとれ、という暗黙の示唆であろうか。この時間割表は教員の職務表でもある。すべて

の秘密を曝しているようで私は自分の職務表を貼るのはごめんこうむりたい。

マグネットで小さなホワイト・ボードを止めているドアもある。ボード拭きやマジック・ペンも用意されており、用件等を記すことが注意書きされている。このボードは教員から訪ねてくる学生へのメッセージを書き込む役割もしているようだ。双方向のコミュニケーション手段として活躍しているようである。これを真似したとして、字のへたくそな私など廊下をとおる人たちにすべてを見られてしまうようで嫌な気分になるのであるが。

ドア一面に大きなポスターを貼っている教員もいる。学会や講演会の案内ポスターである。学外での社会活動に熱心な教員であることを醸し出している。これを見るとしばしば、私も見習わねばと反省させられる。がしかし、開催日をとくに過ぎたポスターなどを見せられると、しらくけるというよりもポスターがみつともないものに見えてしまう。早く剥がせよ。

袋を吊り下げているドアもある。中には講義用の配布資料が入っているようだ。学生が取り出して、持っていくのを見かけたことがある。講義中に受け取れなかった学生への配慮であろうか。ドアの前に来るということは、講義を欠席した証拠であろう。そんな学生にまで気をつかっているのかな。私であれば、こんな配慮はしない。講義中に配布された資料は出席をして、受け取るべきだというのが私の教育方針である。こうした妄想とは違って、ゼミの追加資料かもしれない。これであれば頭が下がるおもいがする。指導熱心ですね。

私が居座っている建物は八階建てなので、ざあ〜とその他のフロアのドアにも目を向けてみよう。

夏場になると、スタレを吊るドアもある。確かに昔と違って札幌の夏は暑くなった。スタレを吊りたくなるのも十分すぎるほど納得できます。でも、スタレは左右均等に吊ってほしい。片側に傾いていると貧乏たらしく見えますが、いかがでしょうか。

飲み屋じゃあるまいし、暖簾を掛けているドアもある。まさか中で一杯ひっかけているてなことはないでしょうな。わが大学は、キャンパス内では禁酒ですぞ。おや隣のドアには在室を知らせる「商い中」という木札がかかっている。まさか。

本のカバーを貼っているドア。ご自分が刊行されたもの以外の著書もありますね。やはりご専門の著書を学生に読ませたい一心からでる行為でしょうか。

資格試験の案内・留学案内のポスターを貼っているドアもある。こちらも教育への熱心が伝わってきます。

ポスターといえば、映画もある。近日、公開される有名な映画である。なるほどご専門は演劇ですね。納得！

英語がご専門のドアには英文の四コマならぬ三コマ漫画が貼られている。立ち止まって読んでみると、不審者と思われるので、流し目でみても読めませんが、ウィットに富む内容なのでしょうね。

おっと！ これは面白い！ 検眼用のシートを貼っているドアをみつけたぞ。ここの住人は外国人教員である。健康診断時に行くこの検眼方式はもしかしたら極めて日本的なもので彼の母国にはないのかもしれない。そこに彼は眼をつけたのであろう。シートはCのマークの色んなところが空になっていて、その場所を答える検眼である。右！ 左！ 上！ 下！ これは最高のアイデアだね。このドアはちょうど階段の踊り場正面にあるので、立ち止まって自分で検眼できる。きつと誰か一人や二人ぐらいはこれを使って検眼したことだろう。かくいう私も先日試みた。残念！ 眼鏡を掛けて〇・一です。研究者は目を酷使する職業なので、ときどきこのドアで検眼することを薦めます。

このようにドアは実に豊かな表情をしている。すっぴんのドアはむしろマイノリティである。

さらに、もっと興味深いのはドアの内側である。私についてはバス・地下鉄の時刻表、発注すべき図書のリストをマグネットで止めている。残念ながら、他人の内側については観察できない。訪問をして、ドアから出るときにしつかりと眼に焼き付けてくるしか手はない。

部屋の使い方、机をはじめ備品の配置も研究室ごとに千差万別である。土足厳禁の部屋もある。絨毯が敷かれているのである。くつろげるよう(?)ソファのような大型のクッションをおいている部屋もある。

書棚に書籍が無い、無い、一冊も無い！ 在るのは手製の木で作った小さな机のみ！ という部屋もある。さすが、哲学者の部屋です。

この観察が唯一できるのは掃除をしてくれる小母さんたちである。彼女らに文筆の心得があれば、きつととても面白い観察文が完成すると思う。それほど研究者たちの空間や備品の使い方には個性が表れているということである。この個性が社会のお役に立っているアイデアを生む源になっているのです。「分かってくれましたか」と言う声がドアの内側から聞こえてくるようです。(二〇一二年十月二十九日、月曜日)

### 3.1. 古本との対話

作家の表現創造力に興味があつて、いわゆる純文学系の小説を読んでいる。今日、純文学を書く作家(エンタメ小説との垣根が下がっている)は少ないので、自ずと過去の作品を読む機会が多い。そして過去の作品であれば絶版になっており、多少のプレミアム料金をつき込んでも古本屋から調達するしか手はない。

古本には私が残す前の歴史が刻まれていることがある。許せる程度のアンダーラインが残っていること、感想めいたコメントが記されていることなどである。とりわけアンダーラインなどは前の読者の思考力や興味の置き所を如実に曝け出しているようで面白い。そうは言っても長いコメントなどは売りものとして書棚に並べる前に消去しておいてくれ、と店主に注文をつけたくなることもある。蔵書印の押されたものはもつてのほかである。

今回、三浦哲郎の短篇集を読み始めて、また違った発見をさせてもらった。旧漢字というか、読みづらそうな漢字をめぐって丸で囲ってあるのである。三浦氏の代表作であり、巻頭に収録されている「拳銃」はわずか十一ページしかないが、この中に囲われものが十一個もあった。確かに、読者の力量によれば、読めない漢字もある。しかし、この程度は読んで欲しいというものも幾つかある。患う、錆び(注)、刺戟的など。文意の流れから読めそうなものであると思うが?。厭だな、睨んで、昂奮など。そもそも表題にある短篇の「篇」はフィードバックで読めたのである?。

私が入手した文庫本は昭和五十六年に出版されている。三浦氏は昭和六年生まれで、四十四歳(昭和五十年)のときに、「拳銃」を『群像』に発表している。氏が受けてきた教育であれば、当然、「適用できる漢字」の範囲内にあったものも、その読者の生きた時代によれば適用外になることもある。

この「拳銃」のみかと思いきやすべての作品群に必ず複数個の囲いがついている。こうなると、この囲みともっと真剣につきあうべきであろう、と思えてきた。

囲いがないので読めたのであろう漢字が次のページでは囲われていた。旧読者は集中力が切れたのかな。一度、囲いをつけた漢字には再度印しをつけていない。彼彼女の几帳面な性格を彷彿させる。後に収録されている作品の中にふりがながふられている漢字もあるが、前に戻って囲いを消去した形跡もない。

余計なお世話かもしれないが、次の漢字は読めたのかな。河鹿(かじか)、狂奔(きようほん)、跛(びつこ・ちんぱ)、細面(ほそおもて)、噤む(つぐむ)など。「怪訝」には「訝」にのみ囲いがある。この一字は相当にお目にかからない漢字であったのだろうか。

だがしかし、旧読者の漢字力のなさばかりを批判(せめる)するわけにはいかない。尊い努力の痕跡かもしれない。かくいう私が真似のできない表現にラインをいれるのと同じ心境からかもしれないから。彼彼女は自分の漢字力を高めるべく読めない語句に囲いをつけ、読了後、漢和辞典を手にしたのかもしれないからである。その証拠に「牡」に「おす」というふりがなが記されている。

想像は広がって、囲いの主の公海にまで及ぶ。囲いをつけた主は特定人ではないかもしれない。これは古本屋から入手した文庫本である。なん層にも渡り歩いたものであれば、その数だけ囲いを入れる輩がいたはずである。当初の輩は巻頭小説のみに囲いをつけたのかもしれない。そして後続の読み手がそれを真似したことも考えられる。

さらに連想は膨らんで、旧読者や店主は次に続く読者にこの種の漢字を幾つ読めるのかを試したかったのかもしれないという思いも浮かんできく。この過去問がなん層に渡って問い続けられてきたのかは知らないが、確かに私も読みづらい漢字に幾つか遭遇した。簪(かんざし)、啖(わらってくれる)など。

またこの範囲内の落書き(?)であれば、交換価値も下がらないとふんだのであろう、店主も気をつかって、囲いを消去しなかったのかもしれない。店頭へ運んだ売り手も交換価値を保つため、細心の気遣いをして、鉛筆を使用している。こうして後の読者にとつても使用価値を十分に保障している姿勢がみえるのは読書好きの証であろう。

最初に囲われた漢字は短篇集の二枚目にある「生憎」(あいにく)、最後は最終ページにある「惹(ひ)かれ」であった。すべての囲いを繋げると、なにかのメッセージや暗号になっているのかもしれない。しかし、もう詮索はこの辺で断(や)めよう。

まるで囲みを観察するような読み方になってしまいかと思つたが、いつものようにワクワクした気分です十五の短篇を読み上げた。

こう書いてきた私の文章の中にも読者によれば、丸で囲われる漢字が幾つかあるかもしれない。そんな上等な漢字は使っていないつもりであるが。

最後に、古本屋へ持ち込むときは、その日付や読了日などの情報をどこかに微かに残しておいていただきたい、という変なことを期待したりしている。(二〇一二年十一月十日、土曜日)

注。原文の「錆び」のつくりは「青」である。

参考文献。三浦哲郎(一九八一)『拳銃と十五の短篇』講談社文庫。

### 3.2. 本の居場所

仕事ながら、勉強熱心(?)な学生たちに参考書の紹介を求められることがある。場所が教室であれば、それらしきタイトル名をメモさせて図書館で借り出すよう指導している。しかし、ときどき研究室へ来る学生たちもいる。それも私の講義科目ではなく、他の教員の科目を履修している学生たちである。「担当科目の教員に紹介してもらいなさい」と伝えるが、指導の一環として教えてくれない場合もあるようだ。自分で探せという親心である。私の手元の本棚には手ごろな参考書が並んでいる。「その質問内容であれば、こんなタイトルの本のこういう章節あたりに解説されているので読んでごらん」「似たような本はたくさん図書館に入っているから借りて読むとい

私がこの二つ目の「……」を発すれば、なにも事件は発生しない。訪ねて来てくれる学生は過去に私の科目を履修し、その顔は覚えていたが名前は出てこない、という彼女たちである。それが証拠に彼彼女たちも名前は告げないが、昨年、先生の科目を履修していた者です、と神妙に挨拶してくれる。彼彼女たちも私を頼って来てくれるので、知りたい内容を確認したうえで、つい「これを貸してあげるよ。読んでごらん」と言ってお気軽の手渡ししてしまう。この台詞が事件の端緒となる。「貸してあげる」のだから、無事に戻ってくることを確信しているのであるが。でも「貸してあげた」本たちは決して戻ってこない。たとえ、それが千円以下の文庫や新書であつてもである。読後の感想でも聞かれると恐れているのか、はたまた返却の催促もしないし、氏名を書き残させることもしないからか、そうした本たちは再び書棚には帰還しない。

同僚の教員に話すと、どなたもきつと同じ体験をしているのであるう、一刀両断にそれは「貸したお前が悪い」と口元に微笑をたたえながら言い返されてしまう。お前も彼彼女らに「良心」のあることを望んだの？ いまや良心は武者小路実篤の色紙のタイトルになるほど超貴重な価値を有するものだ、なんていう雰囲気になってしまう。

この類の本たちはほとんどが入門書であり、かつ献本されたものなので、手元になくてもよい、と割り切つて、最近では、戻ってこないことを承知で「貸してあげている」。

そこで、この「貸してあげる」だが、借りた側にはどんな意味として伝わっているのだろうか。本たちが帰還できないところをみると、「貸して」が抜けて「あげる」のみが受信されているのではないか。「あげる」は「さしあげる」に変貌しているのであろうか。そもそも、他人から借りた本たちが自分の生活空間内に長く滞在していること自体、私には気の休まる思いがしないのであるが。それとも十分に参考にし、哀れで頓馬な教員が読むよう勧めてくれた本なので記念として学生をしている期間だけでも残しておくのであろうか。

献本された本たちほど読まないという自分の習性からすると、「貸してあげた」本たちもきつと読まれていないのであろう、彼彼女の部屋の片隅で居心地の悪い思いをしていることであろう、早く私の所に帰りたいと涙を流していることだろう、と思う。

自分も読まない本たちで書棚を狭くするよりも、瞬間であれ、参考にして読んでくれる方の手元に本はあるべきだと思う。そして、いずれはなにがしかの処分をせざるをえない本たちなので、感謝の念も抱かず、薄情にも捨ててくれることが、より望ましいことだつてある、というようにも思う。

こんなふう理解すると本たちへの愛慕が足りないように思われてしまうかな。本たちの在り処は適材適所であろう。一時であれ、読んでくれる主人の臉に映れば本たちも生まれてきた喜びを感じられるであろう、と思うのだが。(二〇二二年十一月十八日、日曜日)

### 3.3. ニワトリの頭ほどの知恵

安部公房の作品に「良識派」という八三五字(表題と句読点込み)の短篇小说がある。私の言葉で手短かに要約しよう。

ニワトリたちがオリの中で生活するようになった理由(わけ)は彼・彼女らの良識が人間の狡猾さに勝つたからである。昔、ニワトリたちはイタチやキツネなどの外敵におびえながらも大自らのなかでノビノビとニワトリらしく生活していた。そこへ人間が現れ、外敵から彼彼女たちを守護すべく小屋を作り、その中で生活するよう盛んに勧めた。オリの中では、いつもエサ箱は充たされるといふ。一瞬ではあるが、彼彼女たちは人間の親切を疑った。がしかし、彼彼女たちの頭では人間の狡猾な知恵を見抜けず、うまく言いぐるめられてしまう。事実、人間は身の安全と

エサを保障するが、その代わりにタマゴや肉をよこせとは要求していない。一度、受け入れ、都合が悪くなれば、話し合いで改善しようという良識派の意見が採用され、ニワトリたちは進んでオリに入った。

そしてオリの中の狭い自由や安心と引き換えに大きな尊厳を失ってしまった。その後、彼彼女らは良識に戻ることもなく、いつまでもオリの中に入っているのである。

この小説からなにを読みとるかはその読者に任されている。安部氏の文章には、人間の狡猾さという言葉は出てこないもので、それが想像をたくましくさせてくれるのである。

これは私の解釈である。狡猾さという言葉はなくても、狡猾さをにじませている表現がうまく使われており、その対極としてニワトリの愚かさが表現されている、と私は読んだので、この文章に「ニワトリの頭ほどの知恵」という表題をつけた。

しかし、ニワトリの愚かさと読むのは人間からの発想かもしれない。ニワトリからすると、長いものには巻かれる、という発想もある。確かに、ニワトリたちの中には良識を疑う少数派もいたが、これも人間に言いくるめられたり、仲間内での不満分子としてかたづけられてしまう。

また、この小説は良識に囚われすぎるといつまでたっても発展性がない、という教訓としても読める。ニワトリと人間のどちらの立場から読むか、によつて理解は違ってくる。さらに安全とエサを保障する代償として卵や肉を捧げると読めば、ニワトリと人間との共存共栄をテーマにしているとも解釈できる。

わずく見開き一ページの文章にも、こんなに想像力をかきたたせる魔力が秘められている。この魔力も作家であるが故の企みなのである。思わず字数を数えてみたしだいである。(二〇一二年十一月二十三日、金曜日、勤労感謝の日)

付記。この文章は安部公房(二〇一二)「良識派」佐藤雅彦編『教科書に載った小説』ポプラ文庫、一〇四〜一〇五頁所収の読後感である。

### 34. 他人の自伝を書く人の気持ち

私は、これまで他人の生き様に興味を湧いても、それを自伝として調査し書いてみたいとは思わずにきた。自伝の中にあつて、自分と同じような悩みにもがいていた先人の言葉は一条の光であつた。それによつてしばしばピンチをすり抜け勇気を鼓舞されてきた。そのためピンチを迎えると意識して誰かの自伝を読んだものである。とりわけ先人の失敗談は凡人には心強い教師であつた。

でも、自分で他人の自伝を書くという気持ちは湧いてこなかつた。いつも助けられる立場にいた。ところが、ここ数年、作品の中にあつて自分では到底脳裏に浮かびそうもない、創造できない文章表現に出会うたびに、こうした文章を創造できる作家の精神構造を探つてみたいという気持ちに駆られることがある。他人の自伝を書く人の気持ちも、こうしたところから生まれてくるのであろう、と思う。自分と違った精神構造をしっかりと覗き見たい、という心境であらう。

精神構造は、人が生きてきた軌跡の産物である。よつてそれを知ろうとすれば、作家の生い立ち、成長、成熟、衰退を追っかけなければならない。この軌跡の産物は作品の解説文を凌駕するほどの深遠さである。これは正に作家の自伝を創りあげるといふ営みに取りかかることである。

はつきりと記しておこう。自伝を書く人の心境が分かるようにしてくれたのは、黒井千次(一九九〇)『時間』講談社学術文庫、梅崎春生(二〇〇〇)『ボロ家の春秋』講談社学術文庫、宇野浩二(一九九六)「蔵の中」『思い川、枯木のある風景、蔵の中』講談社学術文庫、二五五〜三一

二頁所収の読了後である。(二〇二二年十一月二十五日、日曜日)

### 35. 咳と席

インフルエンザの予防接種を受けるために次男を連れて小児科へ行ってきた。接種にあたり受付で問診表と体温計を渡され、待合室へ入った。

待合室は狭く、我われ親子が入ると空き椅子は二つしかない。受験生であろうか先客は英語の単語帳に目を落としている。他に小学生と母親が受診待ちをしていた。こちらの子供は風邪をひいているようだ。一点を見据え、だらつとした態度で分かる。

そこへ関西弁をしゃべる一〇〇パーセント元気な母親、親爺と体のデカイ息子の三人が入ってきた。おしゃべりを聞いていると、どうやら後二者が受診するようだ。私たちと同じように問診表と体温計を持っている。シンドそうな風情ではないので、予防接種だろう。楽しそうな会話が弾んでいる。待合室の空き椅子は二つである。この親子連れ、母親が椅子に座り、親爺と息子はつつ立ったまま問診表に向かってボールペンを動かしている。どうやら母親は付き添い人として来たようだ。待合室は狭いのである。大人が二人も立っていると邪魔である。

「コンコン、コンコン」

咳をするな。するなら口をおさえろよ。

健康体であれば、一刻も早くこの空間から抜け出したいような不機嫌な空気の中でよくも座つてられもんだな。空気の質が良くないのだ。

「コンコン、コンコン」

咳をするなよ。口をおさえてくれよ。つばが飛んでるよ！ 壁に不時着陸したよ！

続々と病人あるいは予防接種を受ける人たちが入ってくる。明らかに四十度くらいの熱に浮ついた目の患者さんもある。もう空の椅子はない。突つ立ったままの大人は天井に目をやり、幼子は親にしがみつき、椅子に座る私たちは無造作に目を床へ落としている。ただただ緊張感の漂う時間が過ぎていく。

「コンコン、コンコン」

だから咳じゃなくて、席が必要なんだよ。(二〇二二年十一月二十六日、月曜日。これは二十四日、土曜日のでき事作文した。)

### 36. オモチャと道具

今もそうであろうが、私が小学校や中学校へ通っていたころ、オモチャを持って行ってはいけないと教えられてきた。かつてTVコマーシャルにも幼稚園児が自宅で飼っているお気に入りの亀の入った籠を肩にかけて家を出ようとするとき、母親が「亀は置いていきなさい。」と声をかけるのがあった。

学校へオモチャを持って来させない理由は学校での生活に集中させるためである。傍らにオモチャがあつては遊びに神経が向かってしまうからである。またある程度、我儘を抑制させる、おかれた状況に我慢させるためにも自分のお気に入りの物の物はある程度学校へは持って来させない、という考えに基づいているのであろう。学校という非日常の世界と自宅との違いを認識させ、社会生活に適応できるようにするためである。

昨今の大学の教室では、講義中に携帯電話を操作している学生を多く見かける。私のような初老の教員は必ず「止めなさい。今は講義中だよ」と少し叱る口調で注意してしまう。

叱られる学生も不満があるようだ。そんな目つきでこちらを睨み返してくる。いつでも携帯しているから便利なわけで、それを制止されるのだから不満であろう。誰かに連絡をとっているのか、ゲームで遊んでいるのかは定かではない。携帯電話は通信手段という道具である。その通信手段とともにゲームというオモチャが一体となって入っているが故に、ややこしくなるのである。

だが教員からみると、教室内では彼らにとって携帯は明らかにオモチャである。では、これを教育現場に持ち込むことを禁ずることができるのか、と言えば答えは難しい。子供の安全確保のために小学生に携帯電話を持たせる家庭も多いと聞くので……。

オモチャと道具の区別を明確に教え、その使用するタイミングをも諭さなければならない時代なのである。その対象が大学生だから、教員は余計に悩むのである。人類はなんと便利な抱き合わせ商品、オモチャを開発したことであろうか、と思う。(二〇一二年十一月二十九日、木曜日)

### 37. 長グツの効用

この季節になると、ホームルな冬靴よりもオソソドックスな長グツが快適である。積雪が二十センチメートル以上になると長グツでなければ靴の内部に雪が入ってしまう。この長グツを履くと歩行に有利である。純ゴム製なのでばつぐんにスリップ防止効果がある。膝下まで丈があるので足元は暖かい。除雪されていない歩道も気にかけることなく、ラッセルできる。向こうから対抗者が来ても率先して積雪のなかに足を入れて道を空けてあげることができる。その際、「どうもすみません」という感謝の言葉ももらえる。こちらからは心の底から「いいえ。どういたしまして」と返答できる。

ただ一つだけ難点がある。重いのである。もともと私が愛用しているものは今風のものではなく作業用のものなので、余計に重いのである。若い女性たちもブーツと称してオシャレな長グツを履いている。きっと私のものよりも軽くて暖かいであろう。

しかし、この重さが適度な負荷となり、さらに快い疲れを誘い快眠へとつながる効用もまたばつぐんなのである。(二〇一二年十一月二十一日、土曜日)

### 38. 本の買い出し

大学の教員は給与こそ高くはないが、その分いくつかのおこぼれがある。研究や教育に必要な書籍・資料は研究費という費目で購入することが許されている。文献の複写もこの研究費から支弁できる。もちろん、PCも与えられ、プリンター、用紙も無料で使用できる。

この研究費というものが曲者で大学によっては使い勝手が良かったり悪かったりする。幸い、私の職場ではあくまでも研究や教育に支弁するということであれば、使途の領域がフリーとなっている。とりわけ書籍は本来、職場の資産として登録されるべきものであるが、図書館等の収蔵スペースに限りがあることより、消耗品扱いとなっている。この消耗品という定義を書籍に当てはめたこと自体はまさしく正しい。出版されても使用価値、交換価値すら持たない書籍もあるからである。書籍に書かれた知識は日進月歩の速さで陳腐化している。手にとった瞬間に消耗品になっている書籍もある。

さて、ここからが本題(代も含め)であるが、私はこの消耗品としての書籍を定期的に大量に購入してもらっている。とりわけ純文学を収めた文庫本に食指を伸ばしている。一冊一五〇〇円程度として、これが二十冊となると割り引きされても三万円近い金額となる。

今日も十冊程の書籍を担いで帰ってきた。今年はいままで以上に七十冊程の文庫・新書の類を読破

してきたので、読むには苦でない冊数である。名前は知っていても、まだ読んだことのない作家の作品に出会うと「そうか、この作家にはこんな名著もあったのか」と新たな驚きと喜びを感じる。

私が知らないだけで文学界ではおなじみの作家の作品を読んで、名だたる文学賞以上の価値を見出したときの感動は言葉に表現できないほどである。受賞されること以上に大切なものがあることを気づかせてくれる。

普段の気持ち以上に大事そうに背負っているバッグを万が一にもひったくられたとして、盗人は中身の書籍たちを見て、どんな感想を持つだろうか。バッグの口が開いていて、なにかの拍子に地面へ書籍たちをばら撒いたとして、それを見る周りの人たちはどんな感想を持つだろうか。

食料の買い出しのごとく研究室から我が家のこの書齋まで辿り着く書籍たちはまるでねんねこに包まれた赤児を運ぶよう優しく扱われている。この赤児をどう育て成長させるのかは最初に背負った私の責任であらう。

常人であれば、家計簿から最初に削除される本代にかまわず、本の買い出しのできる私は幸せ者だと思う。なので、買い出しでパンパンに膨らんだ背中のバックも軽く感じられる。(二〇二二年十二月二十二日、土曜日)

### 39. 今どきの学生

その一、努力が死語となってしまった学生。

その二、自分で正しく悩めない学生。

その三、他人からの叱咤激励に感動する学生。

その四、自分がなにを学んでいるのか分からない学生。

その五、お金を払って就活塾（就職支援塾とも呼ぶのか）で面接（一連の礼儀作法）の受け方を教わる学生。

その六、自分の就職先として「おすすめの仕事、会社はどこですか。」と平気で質問をしてくる学生。

その七、自分の身の振り方をまるで他人事のように他人に真剣に考えさせる学生。

以上を一言で片付けると、他人から見て、自分の人生について無責任と思わせる学生たちである。(二〇二二年十二月二十一日、土曜日)

### 40. 決められない日本人論

十二月十六日（二〇十二年）の総選挙で三年ぶりに自民党が政権を奪回した。その前の民主党政権は多党からなる寄り合い政権であったためか、またリーダーの資質によるのか「決められない政治」と揶揄されたものである。

思えば、日本は明治の開国も黒船という外圧によって成し遂げられた。高度経済成長期の関税率の引き下げや資本の自由化も外圧によって譲歩してきた。

野坂昭如氏の談によると、この決められない政治の原点は終戦時に発するように思える。自らの頭で開戦の原因を探ることなく、また近隣諸国に与えた苦痛という戦争責任を考え、解決することなく、すべてGHQに、いやアメリカに任せてきた。

国の根幹である憲法ですら外から与えられたものである。国民は、大きな問題は政治家に任せ、その政治家は身の丈を上回る対外問題は外国任せにする。

開戦の責任を問う東京裁判は五月三日に始まり、そしてA級戦犯が処刑されたのは十二月二十三日である。前者は日本国憲法の施行日、後者は現天皇の誕生日である。こうした日取りもGHQはしたたかに決めたのであろう。いかにも象徴的な日取りである。

こう考えると、日本人はいったい何を自ら決めてきたのだろうか、と思いやられる。(二〇一二年十二月二十四日、月曜日)

参考文献。野坂昭如(二〇一〇)『終戦日記』を読む』朝日文庫。

#### 4.1. 本たちの移動

私は買い置きした本を読み終ると、別の棚へ移動させている。そして毎年、この季節になると、その冊数を数えてみる。その対象となるのは文藝物であり、仕事に必要な専門書や雑誌はこの数に含めない。文藝物の内容は純文学が多い。たまに今風なファンタジーやSF物も読むが、懐古的になって古い作品に眼が向かう。今年も文庫・新書の類を六十数冊読んだ。

この家を建てる時将来、増えるであろう書籍で書棚を満杯にたくて、書斎、子供部屋にかかわらず、廊下、上・下階にあるトイレにまで棚を設置してもらった。どうしても空きスペースが広くなってしまいう廊下、トイレの壁に(はめ込み)設置したことは我ながら妙案であったと思う。大工も文庫・新書の寸法に合わせて棚の幅を造ってくれた。

まだ読めない本は二階にあるトイレの棚に詰まっております、読みたいときにはここから書斎へとやって来る。この棚は常に満杯である。もともと眼一杯の踏ん張りで放出した所から何食わぬ顔で新しい物を連れ出してくるというのも変な感性の持ち主と思われそうであるが。

読み終えられた本の移動先は廊下と書斎の棚である。廊下の棚はすでに満杯である。ここは本の頭にさらに被さるように本が重ねられている。

行き場所を失った本は一目散に書斎へと向かうことになる。書斎の棚にある専門書はせつせつと職場へ移され、後には文藝物の文庫・新書が並んでいる。

読了後、長いものでおおよそ三百六十五日の間、この書斎に居た本たちを別の棚へ移動させながら、年末の気分浸っている。これも至福の瞬間となっている。(二〇一二年十二月二十七日、木曜日)

#### 4.2. 学ぶ心

歳をとっているから知恵があるというわけではない。精神的な仕事に就いているから偉いわけでもない。歳、仕事、性別を越えて教えてもらおう姿勢で読み、聞けば、いくらでも知識は増え自分を成長させることができる。

次男が通う高等学校の学校新聞に「拡大鏡」というコラムがある。この記事はきつとこの新聞にかかわっている生徒が書いたのだろう。

自殺をしようとしている同年輩の若人たちに高校生が送ったメッセージである。自殺の理由は、悩みから逃げるため、自分を苦しめている者たちを後悔させるため、など様々あろう。

しかし、残された者たちの立場から自殺を止めるよう訴えているところが大人の視点とは違う。

残された者の中には、自分が救えたのではないかと悩み込み、そのため鬱うつにまでなってしまうこともある。残された者へ接するときの気遣いから、その者との距離をおき、孤独にさせてしまうこともある。大人の言葉では、自殺にともなう二次被害者とも言えようか。

こうした自分の周りにいて自分を気遣ってくれる人のことを一瞬でも思い出して、自ら命を絶つのを踏みとどまってくれ、と文章は結ばれている。

自殺をする人にはこうした心の余裕などない、と言ってしまったえば、それまでである。命にかかわらず大切なものは無くしてみないとその大切さが分からないと言われる。こうした考えを文章に表現できる高校生はしつかりと自分のポジションを理解できているのだと思う。きつと何かで真剣に悩んだことのある生徒さんであろうと思う。

感情の豊かな思春期をどう乗り越えるのかを論さなければならぬ時代である。困ったことに自殺は小・中・高校生に止まらず、就職の決まらない大学生にまで及んでいると聞く。いつになつたら自分や周りを客観的に評価できる大人になれるのだろうか。(二〇一二年十二月二十八日、金曜日)

参考文献。『札幌啓成高新聞』平成二十四年十二月二十五日。

#### 43. 雪、雪、……、そして雪

「こんちくしょうのこのやろう。

どこへ運ばれたいんだ。

お前の居場所は無いですよ。

えい、こうなりや踏みつけてやれ。

やい、三十センチほど頭を下げやがったなあ。

こんなに降り積もりやがって。

人の迷惑も考えろ。

いいかげんにしろい。

元を迎れば水じゃないか。

♪ 溶けて流れりやみな同じ……♪ なんて歌ってられないんだよう。

こんなふうに毎年、天を仰ぎつつ雪と格闘するのであるが、今シーズンが多い、多い、……、多すぎる。

季節が一月ほど早く来たようだ。連日、真冬日の冷凍庫状態である。

♪ 山(屋根)も野原(庭木)も雪(の)帽子(塊を)被り、猫(家人)はコタツ(筋肉痛)で丸くなる(音を上げる)♪

何とか、この雪と仲よくしたいのであるが、平地では無理、無理、……、絶対に無理。こいつは山にのみいれればいいんだ……。そうすりゃ、ありがたがられるんだけどね。(二〇一二年十二月三十日、日曜日)

#### 44. ホラ、教えてよ

本の読み方は百人百様であつてよい。でも、いくら読んでも意図の解らない作品もある。何を伝えたいのか、何を表現したいのか。さっぱり解らないものもある。

道尾秀介の短篇ホラー小説に「ゆがんだ子供」がある。ホラーなので、最初から最後までホラーで完結していればよいのであろう。でも解らない、何を読みとればいいのか。どう読み込めばいいのか。

二十年近くうだつが上がりならず、職場では行き場のない、サラリーマンの男と顔面の「ゆがんだ子供」との地下鉄ホームでのクイズ問答が展開される。男は危険を察知したのであろう、ホーム

の縁で線路を見下ろしている「ゆがんだ子供」に注意の声をかけるところから始まる。男に驚いた後、「ゆがんだ子供」はいきなり三つのクイズを出す。一問でも正解すれば、その褒美として「いなくなつてあげる。」「ことを約束する。この約束は「ゆがんだ子供」から提案されたものであり男が望んだものではない。男はなにも望んでいない。

出された設問からすると、どうやら「ゆがんだ子供」は本当の親ではない者たちに育てられてきたようだ。夕食は食パンでお腹を膨らませているようだ。学校の成績も良くない。その上、顔面が「ゆがんでいる」が故に邪険に扱われてきたのだろうか。

男が「ゆがんだ子供」に声をかけたとき、子供は「見えるの?」……「よかつた、と……口の中で呟き、…」からすると、子供は自分を投影する誰かを探し、待っていたようにも思える。

男と子供の共通点は身近な者から遠く距離を置かれていることである。ともに鼻つまみ者である。そんな共通点の子供はこの男に見つけ、自分と同類になるべく者の未来が「見えるの?」、投影できる相手を見つけて「よかつた」と呟いたのかもしれない。それが証拠に全問不正解であるにもかかわらず「ゆがんだ子供」は正解!「ピンポン」と叫びながら男の体を通り抜ける。「ゆがんだ子供」にとつて、クイズの正解など興味の外であつた。

男は就職活動中らしき若き女性にぶつかられて我に返る。女性はほとほと眼のやり場に困っている。まるで不幸・災難を振り払い、見てはいけないものを見なかつたことにするかのような呪文であるうかなにかを呟き到着した電車に乗り込む。後には「ゆがんだ男」が一人ホームに立ち尽くしている。

「ゆがんだ子供」「ゆがんだ男」に対比させて、「女性」はまだ無垢で前途有望な姿を象徴しているのか。

「子供」「男」「女性」。この三者の位置関係をどう理解すればいいのか。かいてもく解らない。解らないからホラーなのか、ホラーだから解らなくてもいいのか。この答えが解るなら、ホラ、教えてよ。(二〇一三年一月三日、木曜日)

参考文献。道尾秀介(二〇一三)「ゆがんだ子供」集英社文庫編集部編『短篇工場』集英社文庫、三十三〜三十九頁所収。

#### 45. 睦月、真つ青な空

地は純白、天は真つ青、空気は清涼である。この絵にも描けぬ見事なコントラストは、雪国の一時の自然美を象徴している。

列車を止め、旅人の次の泊まりへの思いを断ち、排雪車を始動させた降雪は一息ついたようだ。近傍と遠くに見える屋根の雪は陽光を受けて眩しく、眩しく、銀色に輝いている。小春日和である。

暖かい陽の筋が手に持つ文庫本の文面を眩しくはじいてくる。窓辺のヒータから出る暖気が陽炎のように文字をなでる。

真つ青な空に騙されてはいけない。まだまだ今日は小寒である。(二〇一三年一月五日、金曜日)

#### 46. 他人への評価、自分への評価

「他人をどう評価するかには、じつは自分の人生がかかっているんですよね。」(五三三頁)  
これは養老孟司氏がある文庫本へ寄稿した解説文の一部である。他人への評価の難しさを表現

したものである。と同時に、その評価のいかんが自分の人生の評価に多大な含意をもっているということである。

親や教師は子供の躰や他人への教育を自分が受けてきたように行うと言われることがある。前例を真似ねるといふことである。無難な躰や教育に終始しそうであるが、他人への評価に失敗しても自分の評価を下げずにすむかもしれない。

とにかく他人を指導し評価することは難しい。名選手必ずしも名監督ならず、という格言(?)がある。自分ができることを他人に求めても無理ということであろう。各人の素養を見究めた指導が優先されることを言っている。その素養を見抜かれ、指導されて優秀な評価を得ると、指導者自身の評価も高くなる。

自分の限界を超えるべく努力して現在がある者は他人にもそれを求めがちになると言われることがある。これは私の場合であり、自分で努力することを求めるタイプである。ただしすべての努力を求めるのではなく、ある一線から先は自分で考え、悩み、という教育方針である。でないとも悩み、考え、生き抜く力は身につかない。現状では、悩む力、聞く力、という表題の書籍が爆発的に売れる時代である。悩むこと、聞くこと、を教えられないと、悩めない、聞けない、人が増えているのである。

さて、こうして努力をさせたいのであるが、その成果ははかばかしくなくときがある。こうなると自分の指導方法に疑問が湧き、自分への評価を下げざるをえなくなる。妥協をして、評価基準を下げるか、指導内容を安直なものにするか、という他人への評価基準も変更しなければならなくなる。いつそあきらめて結果が望ましくなくても相手を信じよう、だって「教育は当人の未来を信じていることだからである。」(五三三頁)と割り切りたいときもある。

これが教育の話であれば、まだ安心である。他人への評価と自分への評価は必ずしも比例関係にない場合があるからである。それが証拠に、どんなにいい言葉も相手が聞く耳を持たなければ、心に響かないと言っているではないか。

冒頭の「他人をどう評価するかは、……。」に続けて、養老氏は「女房がいい例である。」(五三三頁)と記している。自分の人生の評価も選ぶ伴侶をどう評価してきたのかに依存すること、誰を伴侶として選ぶかはその人の評価でもあるということか。誰にとつても人生において超困難な評価である。それは事後的な評価しかできないからである。選んだものには人生をかけて責任を負え、ということか。実に、重い、重い、もう一つ重い責任であることか。(二〇一三年一月五日、金曜日)

参考文献。養老孟司(二〇〇八)「解説」筒井清忠『西條八十』中公文庫、五二九〜五三四頁所収。

#### 47. 籠の中でも鳥は鳥

小学生の頃、手のり文鳥を飼っていた。室内で、カゴから放しても、手の平にエサをもっていると啄むくらいに飼ひ馴らしたつもりになった。室内でこうだから庭で放してみようという気持ちに駆られた。手の平に帰ってくるかと信じていた。いや信じ込まされていた。それでもかなりな勇氣をもってカゴから放した。

文鳥は瓦屋根の庇に停まり、こちらを見ることなく、青空へ飛んでいった。後のまつりである。これに懲りることなく、もう二回ほど文鳥を買ってきて、同じことをしてみた。そのたびに勇氣を振り絞った。今度こそ……と。

そして、そのたびに、文鳥は私をかえり見ることなく、未練がましく涙の一粒もこぼすことな

く、一目散に虚空へと消え去った。

名前は手のりでもカゴの中の鳥はあくまでも鳥である。空間がどこまでも続く限り、本能を呼び覚まし、飛び去った。裏切られた悔しさもあつたが、鳥は鳥なんだとも思えるようになった。その後、鳥は鳥でも帰巢本能をもつ伝書バトを飼うようになった。(二〇十三年一月十日、木曜日)

#### 48. 逆走する学生

最近、午前中の講義室に入ると、おにぎりやパンを食べている学生をしばしば見かけるようになった。講義が始まって、まだ口に運んでいるので必ず、注意する。

別の講義(ゼミナール)の時間に、なにかの話題の流れで、こんな学生が目につくようになったけれど、教壇から見ているとみつともなく見えるので、「君たちは節度を守るんだよ」と諭すことがある。

学生は学生以上でも以下でもない。学生は学生である。学習においてわずかな努力を求めるとその拒否反応としてこれまで節度をもっていた学生たちも、おにぎりを食べ始めるのである。

相手が嫌がつていることを、これみよがしに見せつけて無言の抵抗、「努力なんかしたくない!」「勉強なんか、したくない!」「命令されたくない!」をするのである。

まさに逆走である。努力や勉強をしないと何かが獲られないことは知っている。今の自分では「ダメ!」ということも分かっている。でも…でも…でも…である。特別な理由や目的をもって入学してくるわけではない。努力や苦勞は死語となつてしまつた。大学という非日常空間に四年間身を寄せていることが「努力している証」なのである。(二〇一三年一月十二日、土曜日)

#### 49. 小さくても大きな知恵

ある日曜日、以前から予定していたように、妻が友人に逢うために出かけた。家に残つた男ども、私と息子であるが、さて昼食はどうするか、食べに出るか否か。何か食い物はあるだろう。無ければ、久しぶりにチキンラーメンでも買ってくるか。関西生まれのチキンラーメンには私の受験勉強の思い出が詰まっている。寒い夜には夜食と称して、また学校から帰宅後の空き腹を満たすためによく食べた。

私は長男が生まれる年に肝機能を悪くして、人生最初の入院をし退院後、脂つけの多いものはダメ、ダメということで、カップラーメン類は食卓に登場しなくなった。わが家のシェフが居ないときくらい籬たがを外してもよからうという私からの提案を息子たちはすんなりと受け入れた。

息子によると、幸い買いに出なくても、食品庫にあるという。  
え〜〜え!?!である。

それも偶然であろうか、二袋のチキンラーメンがあつた。どんぶりばちを用意し、やかんをガステーブルにかけた。ラーメンの袋には昔から馴染みのマーク、絵柄がついている。お湯が沸く前に袋から麺をどんぶりに入れた。チキンラーメンには絶対不可欠な玉子も準備した。麺をよく見ると中央にまさしく玉子大の陥没が付けられている。こんなあつたかなあ、とはるか昔の記憶をたどってしまう。ここに玉子を割り込めという指示であろう。これはなかなかの新機軸である。昔は麺の中央にうまく割り込めなかつたのだから。袋を開けるにも切り口という表示とともに端に少し切り込みが付けられている。スムーズに開けられるよう配慮したものである。さてお湯が先だったか玉子が先だったか、う〜ん。玉子だろう!

ラーメンだけでは胃が満たされず、クラッカーを一袋食した。この袋にも同様な表示、切り込みが付いている。こんな小さな印であるが、日本人は買手が不便をしないように配慮し工夫を凝らしているのである。こうした配慮は商品やサービスのみなならず至る所で工夫されている。

ところで食品庫にチキンラーメンがあつたということは、久しぶりにこれを食するのは私だけであつたのだろうか、という疑念が心をよぎつた。私の留守時には妻と息子は間にあわせの食事として撰っているのかもしれない。いや、妻のことだから、ずくつとセイブしてきた私のことを気遣い、今日のために二袋だけ買い置きしておいてくれたのだ、と考えることにしよう。そうすれば、このタイトルに合う締めくくりとなるから。(二〇一三年一月十三日、日曜日)

## 50. 自分流でいい

黒田夏子という七五歳の作家が芥川賞を受賞した。

書くことへのこだわりを超えて、自分と共鳴し合う部分を見つけた。

「前例の無いものが書きたい。新しさが目的ではなく、自分の表現したいことを表現できる書き方を見つけた」と思ってきた」

受賞作にはカタカタ、人名、固有名詞は使わず、さらに横書きである。この独特な表現法も高く評価されたそう。ご本人はこの書き方を五十代で獲得したと言う。そして、こうした自分独特の書き方が認められたことに感謝している。(『朝日新聞』二〇一三年一月十七日、木曜日)

文学だからといって、たて書きにすることはない。陋習ろうじゆうとして従ってきたまでのことである。文化を体現している法律雑誌にも横書きのものがある。いいものは縦であれ横であれ評価されるのである。

実は、自分もたて書きをまねて雑文をまとめてきた。どうもすつきりしない。よこ書きの下書きをたて書きに直してワープロへ入力し改行すると手間取りアイデアが散逸してしまうことがある。多少、困惑していたのだ。

そうか。自分らしい表現法を創って、それにこだわればいいわけだ。自分が専門領域で目指してきたことの延長線上を進めばいいのだ。なくんだあ、自分で敷設した線路があるじゃないか。(二〇一三年一月十八日、金曜日)

後日談。

『文藝春秋』(二〇一三年三月号)に掲載された受賞作品「sqさんご」を読み始めたが、二枚でギブアップした。読めない、読みづらいのである。理解をするには多くの時間を要すると思った。縦書きの冊子体の中にある横書き文も異様に見える。どうしてなのか。きつと、私が私になつていないからであろう。(二〇一三年二月十五日、金曜日)

## 51. アナウンスメント効果

ある日のゼミナール。公務員採用試験の一次試験にパスした学生が二次試験の対策についてアドバイスをくれませんか、と言う。二次試験は面接だそう。従来、どんな内容の質問が多くされるのかと尋ねると社会的・経済的テーマが与えられ、個別ではなくグループ討論を行うとのことであった。具体的にどんなテーマを予想しているのかと聞くと、T P P、小子化対策、いじめ

問題あたりだ、と言う。

確かに、この三つはホット・イッシュユウである。このうち、特に、少子化対策についてアドバイスをくれ、ということであった。彼が合格しているのは地方の小さな自治体職員である。ごたぶんにもれず少子・高齢が現在進行中の自治体であろう。これは日本中どこも回避不可能な問題なのである。

他のゼミ生も交えて、皆んなで、皆んなといつても私を含めて三人の少数精鋭（？）のゼミであるが、思いつくままにアイデアを出すことにした。私の通り一遍等なアドバイスよりも、もう一人の男子ゼミ生の意見が斬新であった。

子供をつくらない夫婦が増えているもつともらしい理由は、政府の子育て支援が手薄であるとか、教育費がかかり過ぎるとか、と言われているが、日本人の情報通、うわさ好き、マスコミ報道への従順さから考えて、無責任な言い方かもしれないが、と断って彼は次のようなアドバイスをした。

TVの番組や新聞報道のなかでもつともつと子供を育てる楽しさをアナウンスしてはどうだろうか。子育ての窮屈さ、大変さだけが強調されすぎている。子供を育てることはこんなに楽しいよ、という番組があつてもいいのではないか、そしてその楽しさをこれでもかこれでもかとアナウンスしてはどうかというのである。

ときどき子供が十人以上もいる大家族の子育て奮戦記が放送されることはあるが、これも観ている側からすると、あんなに子供がいると大変だなあ、とくにお母さんの家事は大抵ではない、という印象が残ってしまう。逆に、楽しい面を醸し出す番組編成ができればいいわけだ。たとえば「はじめてのおつかい」のような微笑ましい番組のようなもの。

彼の発想はいじめ問題や校内暴力などが報道されると、どこかに飛び火し多発する現象が見られること、中高生が自殺をすると、それを真似た行動がとられがちなので、この模倣行動を心理的に活用するという発想である。

これを聞いたとき、私は不況になるとTVのコマーシャルには小動物や子役タレントが多用されるという法則めいたことがあることを思い出した。確かにデフレ不況下にある現在、どのチャンネルもコマーシャルではこうした「かわいい系、いやし系」を目にする機会が多い。また視聴率が少し高い番組が表れると、他局が真似をすることは事例にこと欠かない。その筆頭がクイズ番組であり、どこの局をみてもほぼ同じタレントが顔を出している。おまけに司会者も掛け持ち状態である。

学問であれば、彼の発想は経済学ではアナウンスメント効果という。賃金カット、リストラという言葉に過敏に反応して就活を諦めフリーターの道を選ぶ新卒者、結婚相手を見つけないこと自体が大変だということ婚活に精を出す若者たち、いずれも情報に踊らされていることに気づいていない。これらはすべてアナウンスメント効果である。

多くのTV番組を政府の規制の下に「多子化アピール」手段として使ってみる手はあるかもしれない。だって総理大臣が過去最大の公共事業を実施するという腹案を公表するだけで十数年来実現できなかった為替レートが瞬時にして「超」円安になるのだから。

人の行動なんて理屈ではなくイメージに作用される側面を多々もっているということである。規制というと毛嫌いされるかもしれないが、かく言う私も好きではないが政府広報の内容をうまく構成すれば、多子化へと舵をきることができるかもしれない、と思った。(二〇一三年一月十九日、土曜日)



#### 54. 返事なし

日曜日の午前十一時二十分頃、妻が階下から「お昼は塩ラーメンとうどん、どっちがいいですか」と優しく声をかけてくる。次男がどちらかを答えたのだろう。その後、妻からの問いかけはない。たまに「お父さんはどっち」と聞き返してくることはあるが、私は無言のままである。読書に夢中になっている私はこんなとき一言も発しないのである。

たまに次男が留守のときなど一声かけた後、無言の書齋まで来て、「トントン、うどんとそば、どっちにしますか」と口でトントンと言いながらドアをトントンとノックし問いかけてくる。こんなときは食事を準備してくれる妻がありがたい存在であると思えるとともに昼食時間を後にずらせないか、と発しそうである。でも口にしない。そうしたら大変である。「じゃあ、いつ食べるの？」と、怒りを含んだ声で詰問されるのがおちである。

食事を作ってもらっている立場のくせに変な理屈であるが、わがままを通して妻のペースで食事を摂るのが一番いいのである。(二〇一三年四月七日、日曜日)

#### 55. 読書

私の読書法を紹介しよう。読書というからには専門書ではなく、趣味本が対象となる。専門書は腰をすえ、何年、何十年にもわたって読み込むものなので、私にとって趣味の域を超えるからである。

さて、私は読みたい本を一冊ずつなど購入しない。まとめて二十数冊を購入する。そして、書棚に並べず、テーブルに一番興味があつて読みたい本を底辺にして、その上にその他を積み上げる。昔、プロ野球の投手の打順が九番で定位置だったように。本来、最も読みたい本から読了すべきであるし、そのために購入したのだから、と言われそうであるが、私は違う。購入した本は全て読みきるといふ読書癖があつて、二番目、三番目、……、二十番目も気になるのである。ただし、底辺に置かれた本は定位置を占めるが、その上に積まれたものはしばしば順番が入れ替る。負けの込んだ野球チームの監督が打順を入れ替えるように。

底辺に辿り着くには二ヶ月あまりかかることもあるが、やつと底辺にくると「永く待たせたな。よし、読んでやるぞ!」という気合が入る。まるで底辺にくるまで自分を焦らしているかのようである。いや実際、焦らしているのである。こうすれば、購入した本は全て読めるし、底辺にある本も集中して読めるのである。現在、カラスに興味があつて、この鳥を擬人化した物語を作っている。テーブルの底辺には『カラスの教科書』が定位置を占めている。(二〇一三年四月十三日、土曜日)

#### 56. 遠くて……遠い故郷

歳を重ねると生まれ育った故郷が一段と懐かしく想われる。何か事あるごとに故郷が気にかかる。遠くて……遠い故郷。これは二つの体験からの感想である。公共交通機関の整備された街に住むと、そのスピードは速く経済の法則により料金も安価である。ひとたび故郷を目指す時、特急は快速レベルのスピードになり、かつ料金も割高である。どうも故郷に近づくほど、遠くて……遠い故郷になる。

次の感想は、人情というか、人の仕事の遅さというか、礼儀知らずというか、もつと根本的な理由があるようだ。先日、書物を刊行したので、故郷と近隣の公共図書館へ寄贈をした。蔵書目録への登録など、二の次として、まず礼状を送付して欲しいものである。郵便物が無事に届いた

のか否かも確認できない。これが面白いことに近隣の公共機関からはすばやく届くのであるが、故郷からは届かないのである。大都市の公共機関は公衆の目が光っており、どんな落ち度も指摘されることのないよう礼儀だけはしつかりしている。礼儀だけなんて言うと、失礼かな。受入れ後もしつかり管理してくれている。

一方、のんびりした故郷からは何の音沙汰もない。もしかして余計な物を贈りつけられて、市民の利便性よりも、自分たちの業務が増えたかと迷惑がられているのではなからうか。遠くて……遠い故郷。昔ながらの人情は田舎にあつて、大都市からはその姿を消したなんて、しばしば揶揄されることもあるが、この点においては大都市の方にはるかに人情味がある、と言いたい。でも、こうした対応の違いを人情に帰すのは酷であろうか。組織の作り方、組織の運営上の時間軸が違ふと好意的に解釈したい。時間の流れの違いである。私の亡親父はそうであった。

彼はよく言ったもので、「便りのないのは良い知らせ」。返事を送らなくても無事に着いていることの確認など求めるな！ と言うことである。だって自分が生まれて育つて、今も気にかかるとの故郷の人たちを悪く捉えられる訳がないもの。

なお、確認として記しておくが、私の卒業した高校の図書館からは、すぐに受け取りの丁寧な葉書が届いた。田舎の公立図書館からは音沙汰がない、残念です。(二〇一三年五月五日、月曜日)

## 57. 読みの浅さ、深さ

たとえば、本を刊行するプロセスを考えよう。書き手は、まず下書きをして、それを原稿用紙にないし、PCに入力する。いきなりPCへ入力する方もいるであろう。次に、原稿のチェックをする。PCで入力したものであれば、プリントアウトする。この段階で、すでに一回ないし二回はチェックをしている。

さらに作業は進んで、出版社へ原稿を送り(入稿)、それがゲラとなって返ってくる。ここでも入念なチェックをする。プロ意識の高い編集者がいれば、文章等をチェックしてくれる。通常、この作業を校正と呼ぶが、これを三回行う。その間に、誤植やミスを見つけ修正するのである。この作業がすべて終了して、文章は本となって現れる。

これを学生用のテキストとして採用しようものなら、書き手は、ここでも自ら書いた文章のチェックを迫られる。あれだけ目を通してきた文章に、ミスを見つけてしまうことがある。思わず、何回、読み、見直したんだよ、と自嘲気味に怒りを込めて、自分を叱りつける。あつてはならないことなので、叱るのである。完成して、人様の手に渡ってから、ミスを見つければ、何たることか。でもしばしば、これがあるのである。

読み手が気づいて、お叱りの手紙をもらうこともある。そのお叱りの部分が事前に自分で気づいていた箇所であれば、お叱り度も和らぐ。がしかし、自分が気づかない部分で、こうしたミス指摘されると、これはもう赤面、平謝りしかない。人間、完璧ではないので、ミスもしようがない、と開き直ることもできる。が再び、しかし、である。あんなに見直す機会があつたにもかかわらず……。きつと誰か他の達人にチェックをお願いすれば、ミスの数も減らせるのであるろうが。

これは、きつと読み込み方が違うのであるろう。完成し、いざ学生たちに与えて説明するとなると、理解されるよう書かれたことを再々チェックすることになる。チェックの深さが違うのだ。何度も読み返しチェックをしてきたので大丈夫だろう、という潜在意識でチェックをしてきたのであるろう。読みが浅いのである。いわゆるスルーすることになってしまっているのである。

そんなこんなで、今回、刊行したテキストの二箇所ミスを見つけてしまった。学生に指摘さ

れる前に自ら告白をしておいた。基本的なミスであつても、読み込んでくれない学生からは何の反応もないのが実情であるが、自分のミスは自分の責任だと猛省している。あんなに見直す時間はあつたのに……である。(二〇一三年六月二日、日曜日)

## 58. 肥料

先月末に蒔いたインゲン豆の芽が数本しかでない。なぜかな？ きつと化学肥料を入れすぎたのだと思う。肥料焼けしたのであろう。いくら水を掛けたところで、芽が出るはずがない。保護しすぎたのである。

これは教育にも当てはまる。教師がいくら熱心に教材を与え、熱弁をふるつても、相手が学ぶ意欲を強く持たないと徒勞に終わりがちである。

種を蒔いたら、多少、日照りが続くようとも放っておくべきであろう。それが親切というものである。

意欲のあるものは自分で根を張り、養分を吸って生長するのだ。余計なお節介はしないことが相手にとって大きな親切になることはままある。(二〇一三年六月二十七日、木曜日)

## 59. 草

アンナ・カヴァン (Anna Kavan, 一九〇一〜一九六八) の作品に「輝く草地 (A Bright Green Field, 一九五八)」がある。これはヘロインにおぼれ鬱病と闘った作家の幻覚から生まれた作品と言つてもよい。事実、訳者による紹介にはそう記されているし、幻覚を「私は幻を見た。」という文章表現が幾つか出てくる。ヘロイン中毒者が書いた文章であることを知らされていなければ、草地に恐怖を覚える、緩いホラー小説として位置づけることもできる内容である。薬物中毒者は様々な幻覚に襲われると聞く。カヴァンの場合、その対象は緑の草地であつた。もちろん草の表情も幻覚的に描かれている。

カヴァンは「無数の草の葉が侵入してこようとする夜に立ち向かうために神経を集中している。」(四二二頁) ことが分かるという。そして草地は誰もが恐がる夜 (暗闇) よりも強靱なものとして理解されている。「草地は太古から繰り返かえされてきた夜の力さえ封じこめることができるのだ。」(四二二頁) 草地は陽の当たらぬ夜にも負けず生き延びてきたということだ。

カヴァンにとって恐怖の根源は草のその生命力にある。土中の腐敗物を栄養素として摂取し「境界を越え、すべての命を破壊し、明るい緑の棺衣で世界のすべてを覆う。その下で生けるものはすべて滅びる」(四二二頁) ほどの途方もなく執念深く狂気めいた増殖をする生命力である。つまり草地への強迫観念から生じる幻覚を文章化している。

この草と戦うには刈り落とすしかない。しかし、草の野望は敵に対して油断なく警戒しつつ「世界の表面を覆い尽くすその日を目指」(四二二頁) のみである。

幻覚から生まれた作品と評したとしても、ここまで草を文学作品に仕立てた作家がいたであろうか。またカヴァンでなくても草の生命力を考え直してみると、健全な我々でさえその増殖力に恐怖を覚える体験している。そして、人生訓として「雑草のように踏まれても、踏まれても逞しく生きろ」と言うではないか。

草の生命力が自分にも及んでくる、草に我が身を滅ぼされるという異常なまでの強迫観念を鬱病者が文章化したということであるが、こうしたことは草に限らず、色々な面倒事を処理するときに「夢」となつて出てくることもある。その夢を覚醒後、言葉や文章で表現できるか否か、の

違いだろう、と思う。

こんな草あつたよなあ。ある！ ある！ 刈っても刈っても、抜いても抜いても、化学兵器(除草剤)を投入しても、我関せず、の意気込みで顔を出し、領地をどこまでも拡大しつつある「スギナやどくだみ」が脳裏に浮かぶ。確かに、どこまで根を張るんだ！ と言いたくなるような雑草(?)、薬草(?)ではある。迷惑を被ってはいる、でもスギナやどくだみの夢を見たことはない。これでは書けないね。(二〇一三年八月三十日、金曜日)

参考文献。アンナ・カヴァン(西崎憲編訳)(二〇一三)『輝く草地』『短篇小説日和 英国異色傑作選』ちくま文庫、四一一〜四二四頁所収。

## 60. 冷蔵庫の製氷室

黒井千次の作品に「冷たい仕事」という短篇がある。今もホテルや旅館の部屋にある小型の冷蔵庫を開けると上段に冷凍庫が付いている。これを製氷室と呼ぶこともある。この冷凍庫、使い込んだものであれば、霜取り機能がすっかり効かず、冷凍庫からメタボのお腹のごとく氷が張り出してくる。まるで、氷山がいまこの瞬間に海面に崩れ落ちそうな体勢で庫にへばりついている。これを見ると男という生者はなんとか取り除きたい、溶かしてしまいたい衝動に駆られる。冷凍庫を正常に使いたいとか、電気を浪費したくないとかではなくて、男の目にはなにか自分の行く手を阻んでいる障害物のように写るのである。

さて同僚の結婚披露宴に出席した上司が部下と旅館の同じ部屋に泊まることになった。明日は接待ゴルフにも参加する予定である。上司は、部下は二次会にも顔を出すことを見越して、先に旅館へ帰る。宴席の酒で乾いてしまった咽喉を潤そうと、冷蔵庫の扉を開け、水に氷を浮かべれば、もつと良かろうと冷凍庫に目をやる。その目には氷攻めにあっている冷凍庫が飛び込んでくる。ふと自宅でも同じ状況を目にし、妻にこの氷を溶かすことを進言したことを思い出す。妻からは冷凍食品を保存するのだから、仕方ないと諭される。あげくの果てには、霜取り機能の付いた立派なものに買い換えるよう催促までされたことがある。

ここは旅館である。彼の行動を制止する者はいない。絶好のチャンス到来である。彼はこの氷山と化した氷をなんとか溶かしたいと思案を始める。直接、氷を割るような道具を使ったのでは冷却器を壊しかねない。どうにかしてこの冷蔵庫を助けたいと悩んでいるうちに部下が帰ってくる。真剣な眼で冷蔵庫と対峙しているこんな自分を見られたくなくて、上司は布団へと逃げ込む。アルコール漬になった胃袋を潤すために部下も冷蔵庫の取っ手を引く。

「これは……凄……い……」

「冷蔵庫がどうかしたか？」

「先輩、先に休んでください。ぼかあ、仕事が出来ました」

「仕事は終わった筈だぞ」(七十頁)

部下にも実体験があつたのであろう、

「朝までに、これを溶かさなくては……」(七十頁)

と言いながら、入念に氷を観察しはじめた。

その姿を見て、上司は子供たちがなにかもの珍しい物を見つけると、われ先に第一発見者らしく叫ぶように、

「その氷は俺が見つけたんだ」(七十頁)

と、早速その占有権を主張した。

そして交渉が始まる。部下はどうしてもこの氷を自分で溶かしたいと言う。

「すみません、それならこの氷をぼくに下さい。(略)」（七一頁）

「やるわけにはいかないな」（七一頁）

と、上司が占有者めいた主張を繰り返す。

部下は執念深く、

「ゆずってください。五百円で。千円でもいい。うちではなかなかやらしてもらえないのです」（七一頁）

と、悲鳴のような哀願をする。

金を受け取ったか否か、は別として、上司は冷却器の表面を絶対に傷つけないことを条件に氷山を溶かす権利を部下に譲る。

ここから上司と部下の格闘が始まる。氷山をライターの火、湯呑みの水、魔法瓶のお湯など、の攻具で襲いかかる。

「朝までに間に合うでしょうか」

「間に合わなかったらゴルフを休んでも取ってしまわなくてはな」（七二頁）

ここまでくると狂気じみた執念の一語に尽きる。

しかし、こんな攻具ではどうもい埒は明かない。そのとき、部下が取り出したのがヘヤードライヤーであった。ドライヤーを握る部下の額にも汗がにじむ。そうしてついに氷山がゴトリと落ちる音を聞いたのは午前三時近かった。氷と水気をドライヤーに食い尽くさせた後の庫内を見て、上司と部下は、

「冷たい手を握り合」（七三頁）い、これまで以上の信頼関係を築きあげたのである。

「ぼく達、ここの旅館から感謝されてもいいでしょうね」（七五頁）

と部下が言えば、

「大分電気を使ったがね」（七五頁）

と、上司が返す。

その後、仕事を果たしたという達成感をもったまま二人は布団へともぐり込んだ。

\* \* \*

この体験であれば、私も毎年、繰り返している。職場においている冷蔵庫は二十五年ものであり、すでに霜取り機能は効かない。スイッチを「強」に合わせカッチとしても無駄骨折りである。一年で完璧に氷山と化す。その面積は冷凍庫に等しくなる。つまり冷凍庫は氷山のためにあって、アイスクリームを凍らせるためにあるのではない。

これを毎年、一回、必ず溶かすのであるが、その方法はいとも簡単である。ドライヤーは使わない。職場ではお盆休み中に電気系統の検査が行われ、ほぼ終日停電状態になる日にちが決められている。この日の前、二三日間はコンセントからコードを抜き、冷蔵庫の扉を開放す。真夏である。すぐに、ポタポタポタというリズムカルな音とともに氷は溶け始める。何と熱に弱いものかと変に感心すらさせられる。冷凍庫の下の網棚にプラスチックのボールを置き、この溶水を受け満杯になれば隣の流しへ捨てる。しかし四六時中、部屋に居られない。夕方には帰宅する。ボールの溶水は捨てられない。きつと夜も暗い部屋にポタポタポタという水音を響かせながらじわじわと溶け続けているのであろう。三日後に部屋に入ると冷凍庫の氷も、ボールに溜まったであらう溶水もきれいきつぱりと蒸発し、なくなっている。ふと床を見ると、冷蔵庫のあるところから、ソファを越え、PCを乗せている机の下まで茶色の染み模様が付いている。氷山の溶けた水が床を浸食していった道筋である。まるで寝小便をした布団を日向に干した跡のようにも見え

る。ここまで侵食してきたのか、と感心させられるほど、大量の水が流れたのである。

もし守衛さんが夜回りをして、ポタポタポタという響きを聞きつけ、部屋の鍵を開けたなら一瞬、真冬でもないのに水道管が破裂したか？ と慌てたことだろう。

すみません、毎年、こうして氷山を溶かしています。(二〇一三年八月三十一日、土曜日)

参考文献。黒井千次「冷たい仕事」北村薫・宮部みゆき、(二〇一二)、『名短篇、ここにあり』ちくま文庫、六十一〜七十四頁所収。

## 61. 読書と列車

ある意味、私は列車やバスの旅行が好きだ。ある意味と言ったのは、本来、外出好きではないが、こうした公共機関を使った旅にも私なりの楽しみがあるからである。それは車窓からの景色でも、車内弁当でもない。そう読書である。車内で読み始めた文庫本に夢中になっていたら、降車すべき駅を過ぎてしまった経験もある。また、用事もないので読書中の文庫本をもっと読むために、このまま乗り続けていきたい、なんて気持ちになることもしばしばある。こうした体験は私に限らず読書好きであればどなたも一度や二度は体験されていることと思う。

とくに、今日は雨の中の北帰行(?)である。業務で旭川市へ向っている。日曜日というのに、さすがによく利用される路線だけあって、ほぼ満席のようだ。幸い、雨粒が車窓を曇らせ、外の景色は見えにくい。読書にはうってつけの環境である。今回は読み残した短篇集を一冊、持ってきた。昨夜もある作品を参考に自分なりの超短篇小説を書いてみた。五千字が限度だな。もつと飾りの文章を入れないと八千字、一万字には及ばない。書くことは楽しい。今も楽しくこの文章を書いている。想像力をフル回転させて文章を作っていると時間の過ぎるのも忘れてしまう。この時間がずくと続いて欲しいと願うのだが、特急列車は停車するたびに到着駅が近づいてくる。業務出張であることを一瞬も二瞬も忘れさせてくれる、この雨がまたいい演出をしてくれてもいる。さてと、切符を用意してバッグを持って、降りる準備をすることにしよう。(二〇一三年九月一日、日曜日、出かける前の自宅で書いた。)

## 62. バス亭までの旅

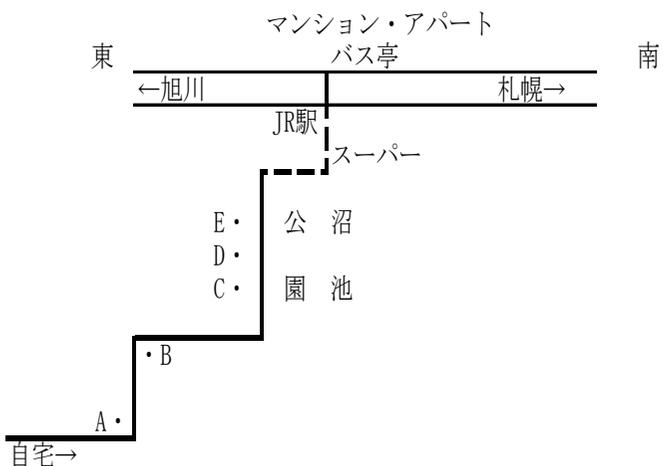
吉行淳之介氏の随筆に「街角の煙草屋までの旅」(同名のタイトルで講談社文芸文庫、二〇〇九年、一七〇〜一七四頁所収)がある。これは街角にある煙草屋までの間で起こった事件や出来事、風景などを文章にしたものではない。ヘンリー・ミラーによる旅の定義に共感した吉行氏が、では街角にある煙草屋までの散歩も旅と呼ぶに相応しかろう、と考えて命名したものである。

では、ミラーがいう旅とはなにか。それは人生や生き方を変える外出のことである。たとえば、飲み屋であれ、角の八百屋であれ、そこへ歩いて行くときさえ、再び家に戻ってくるのが保障されていない航海と似た第一歩であることに気づけば、それはすべて旅になる、という考え方である。したがって何か伝統的な遺物を観て回る観光とは区別されている。ちよつとウオーキングをするといつて一歩、家を出ても再び戻ってくるのが保障されていないことを意識しさえすれば、それは旅になるというのである。

ここで観光とミラーが定義する旅を時間軸で私なりに再定義してみたい。観光とはいずれ自宅へ戻ってくるのが前提とされた行動である。出発から戻るまでの時間には継続性がある。ミラーの旅は戻って来れないかもしれない、という時間の終焉も含んでいる。

旅をミラーのように捉え、時間軸で定義しなすと私たちは毎日、恐れもせずに旅に出ている。学校へ通う、会社へ通勤する、スーパーへ買い物に出かける、どんな手段（徒歩、自転車、自動車、飛行機、船など）を使おうが、どんな些細な外出であっても、再び無事に戻れるという保障はない。これらはすべて旅である。毎日、こんな気持ちをもつて外出できれば、どんなに新鮮な時間を消費できることであろうか。気も付かず見過ごしていたことに、何か新たな発見をする喜びもある。

これにヒントを得て毎日、繰り返し返される旅の途中を振り返ってみよう。私の場合、バスでの通勤である。地図に示したように、自宅からバス停までの道順は見事にカギ型をしている。自宅を出て、右へ左へ右へ左へ右へ左へと曲がり、徒歩八分ほどでバス停に到着する。この間に色々な旅の時間がある。



まず自宅を出て、右へ進みA地点を左に曲がれば、振り返ってもわが家の屋根は視界から消える。自宅と繋がっていた自分の時間が終焉してしまいそうな瞬間を感じる。この角のお宅には、玄関先にドラム缶型に刈り込まれたオンコ（イチイ）があり、これが雀のお宿になっており、夕方ともなると、チュンチュンと騒がしい。旅から帰った安堵を語りあっているようだ。外からその姿は見えない。庭はきれいに掃除されており、道路側に拳大の実をつける桃の木がある。住

人は食べないのであろう。また野鳥が啄んでいる姿も見ることがない。毎年、熟した実は道路に落ちている。受粉から熟れるまでの時間の終焉である。ところが今年の夏前であらうか。花はついていたが、その後、枯れ枝が目立ちはじめ、今ではすっかり枯れ木になってしまったようだ。素人目に推測すると、きつとご主人が剪定をした際に、木の生命線を切ってしまったのだろう。木の生きてきた時間、生命の終焉である。熟れた実を見上げながら、子供の頃に田舎の桃畑でいたずらをしたことを思い出したものである。思い出は過去への時間旅行である。

B地点のお宅には道路に沿って畑がある。先代のおばあさんが熱心に野菜作りをしていた。今は、その耕人も代わったことからすると、おばあさんの生きてきた時間は終焉したのだろう。世代は代わっても野菜作りは続いている。陽当たりがいいので大きなスイカも収穫できる土地であ

る。先日、青い林檎が一個、袋を掛けられたものがもう一個と実をつけているのを見つけた。この木があったことには気づいていたが、林檎だったようだ。実をつけるまで枯れることなく時間を継続してきたのだろう。このお宅には葡萄の木もある。ここを歩くたびに陽当たりがいいと野菜や果物もよく獲れるよな、と独り言をつぶやくことがある。

右へ曲がった突き当たりは公園になっている。ブランコ、滑り台、てんとう虫や熊の乗り物がある。砂場もあずま屋もある。私の息子たちが小学生の頃、夏休みになると毎朝、この場所でラジオ体操をしたものだ。町内のお年寄りたちが集まり、ワイワイ・ガヤガヤとねむっている身体を解すのであった。私の息子は、ここで出会ったお年寄りに大学進学祝いをもたらしたこともある。犬の元ん太（？元旦那にもらったのでガンタと名づけたと聞いている）に出会ったのもこのラジオ体操であった。町内会の花火大会をしたこともあった。これらは二度と取り戻せない終焉した時間である。

あずま屋は散歩をする年寄りたち、遊具で遊び疲れた親子の休憩場所にもなっているが、ときどき近所の高校生カップルが仲睦まじく楽しい時間を過ごす場所としても利用されている。その横を通り過ぎるとき、おじさんは「青春だなあ！」と心の中で叫んでいる。いつまでもこの時間が継続することはないぞ、と過ぎたわが身の時間を振り返る。

この公園、進行方向の右側が木々の森で、その下には調整池がある。見下ろすと池には大きな魚影もあり、天気の良い日など釣り糸を垂れる人もいる。釣り人にとって悠久の時間が過ぎるときである。池の入口の沼で生まれたヤゴが秋になると私の畑へトンボとなってやってくる。その後、次代の卵を残して時間は終焉する。

春から秋にかけて、深い緑で覆われ、向こう岸にある高層の住宅街を透視できないが、秋になるとすべて裸木になるため丸見え状態になる。毎年、時間の始まりと終焉を繰り返している。カラスをはじめ、幾種類もの野鳥が飛びかい、リスにも遭遇する。運がよければ、ヘビにも出会う。ここでは息子たちとドングリの実を拾ったこともある。でも時間の終焉した大きな枯れ枝が落下していることもあるので、木々の間は注意して歩かないと、頭上からのとんだ贈り物で怪我をしかねない。用心、用心。

C地点のお宅は昔ながらの瀟洒な△屋根である。このお宅の庭もきれいに整えられており、秋に落葉を手箒で掃き集めていたかわいなおばあちゃんがいた。今は世代もかわったのであろう。あのおばあちゃんを見かけることもなくなった。おばあちゃんの時間は終焉したのであろう。公園側に大きな栗の木があり、その季節になると実を歩道に落とす。これをリスがほっぺに詰め込んで逃げる現場をしばしば見かけたことがある。生きるという時間を継続するための微笑ましい営みである。

D地点のお宅の屋根は冬場、危険である。二階の屋根に積もった雪は公園に沿った歩道に確実に落ちてくる。窓からへっ尻の部分を棒で突き落とせばいいのに……、と他人の家のことでありながらも心配してしまうこともある。ここを歩くときは、常に屋根を見上げる。落雪で時間を終焉させてしまう運の悪い人もいるので……。

E地点のお宅は昔、このあたりの土地をもっていた人であろうか。ブロック塀の向こうにある住居との間はかなり広い畑になっており、数年前までおじさんが野良仕事をしていた。上手く作った野菜を歩道から眺めつつ、作り方を教えてくれないかな、と思ったものである。きつとおじさんは農業をしていたのだと思う。豆やトマトの支柱の立て方が玄人のようにみえた。その仕事の仕方がいかげんではない、ということである。今はすっかり雑草畑になってしまっているの

で、地力も落ちたことだろう。おじさんの時間の終焉と畑のそれが比例しているように思える。

この公園の途中にある階段（地図の……）までが私の町内会の南端である。階段の下は右側奥にある調整池へと繋がる沼地になっている。ここを沢と呼んでいるが、その沢に向って下りると、その名もどんぐり橋がある。大雨が降ったり、春先の雪溶け水で沈没してしまう橋である。手前にある階段のその左右には桜の老木があり、季節ともなると桜のトンネルができる。空が見えないほど枝が伸び、頭上から桜吹雪が舞ってくる。おもわず顔を上げさせられる景色である。桜にとつて一番の見せ場となる時間がしばらく継続する。

橋のすぐ手前にある雑草は刈り取れば整然とした芝生のようになる。街灯も設置してあることから、夏場、ときどき若者が夜中に遊んだのであろう花火の焦げた跡、空き缶が散乱している。以前は、ここにもゴミ箱が置いてあったが、今はない。楽しんだ時間の余韻はゴミを持ち帰り自宅のゴミ箱へ捨てるとき、終焉するのであろう。

夏前には、ここで幼稚園児たちが先生を囲んでお弁当を広げ和んでいる光景にも出会う。階段を下りてすぐ右端に沼から池へと繋がる木の橋が延々百メートルほども架かっているが、積雪と沈水のために腐ってしまい、いつのまにか、この橋渡るべからず、という立て看板が設置されてしまった。こんな橋なんか造らないで、自然のまま、放っておけばいいのに……、と何度、思ったことか。終焉までの時間が限られているものには手を加えないことが望ましいと思う。こんなところにも税金の無駄使いがあるのだ。

橋を渡って、次の階段を上りきると、道路にでる。そして手押し信号機がある。この道路は国道への抜け道なので交通量が多い。時間を終焉させる事故を回避するためにも信号機が設置されて良かったと思う。渡れば、スーパーとパチンコ屋の駐車場に入る。これを斜め右に横切って、駅前の横断歩道へ出て、駅横の国道を跨ぐ陸橋を渡り、右へ十メートルほど進むとバス亭に到着する。国道に面して左へ向えば札幌方面、右へ向えば旭川方面へ行ける。このバス亭の前を近所にある大学の学生たちがノンビリと通り過ぎていく。時間に終焉があることなど夢想だにしないであろう。若いのだから、それでいいと思う。夏場など、目の前を横切って行く、女子学生の胸の高さを目測しているようで、気まずい思いをすることもある。こんなときは線路の向こう側にある緑色した防風林を眺めるような仕草で誤魔化している。この防風林、春から秋へと時間が過ぎるにつれて、木々の間から、その向こうにあるビルディングが透視できるようになる。私は平日であれば八時三十分の札幌駅行きのJRバスに乗り込む。職場までは、まだ旅の途中である。

旅を終えたもの、旅を繰り返すもの、旅を意識しないものなどバス亭までの間で発見すること、気づいたことは多々ある。この道を歩きながら、二度と自宅へは帰らないという思いを抱いたこともないし、人生を左右するような意思決定を思案しながら歩くということもない。しかしわずか八分程度の旅ではあるが、バス亭までの四季の風景を見たり、世代交代を意識したり、野鳥のさえずりを聴いたりすると、この先の人生、もつとゆつくり旅の時間を消費してもいいよな、という思いにさせられる。（二〇一三年九月五日、木曜日）

### 63. 慣れと癖

土曜日というのに、そしてまだ夏休みというのに職場へ出て雑務をしてきた。往きはバスでターミナルの一つ手前のバス亭で降車し、そこから徒歩で三十分ほどかけて歩いた。用事が終れば、早々に帰宅する勤務態度が身につく、いつも足早に職場を出る。天候が悪いときは、降車したバス亭まで徒歩で向かい、そこからバスに乗車して帰ってくる。大雨、大雪でもなければ、そのバス亭を通り過ぎて、九十分ほどかけて徒歩で帰ってくる。丁度、講義一コマ分の時間で自宅に戻

れるということを確認してからは、日曜日の散歩も三十分ではなく、四十分でもなく、九十分ほどになった。講義一コマ分を基準としている。

長い時間、歩いているように思えるが、歩き始めるとそうでもない。慣れてしまえば、何ともない。帰るのに必要な時間を考えないで「このままどこまでも歩いて行ける」と勘違いすることもある。水泳と同じで行きよりも帰りが大変ということを忘れてしまっているのである。そうして基準を超過して往復三時間近くなると、帰宅後、身体のあちこちが痛くなる。やはり講義一コマ分が身体にもいいようである。

この散歩を始めてから、自宅に居るときにはその時刻になると窓の外を窺う機会が増えた。曇り、晴れであれば、自宅から右側にある一つ向こうのJR駅まで行って、トイレに寄って帰ってこよう。雨、曇りであれば、自宅から左側にある一つ向こうのJR駅まで行って、トイレに寄って帰ってこよう、なんて夢想をしてしまう。

私が歩くことに抵抗を感じなくなったのは五十二歳のときに単身で一年間海外生活をしたことによる。二日に一回スーパーへ買い出しに行くのであるが、私は往復二時間かけて徒歩ですませていた。もちろんバスも利用できた。しかし定刻に来るはずもない乗物をじっと待つくらいであれば「よし、歩こう」と決めてしまったのである。重たいリュックを背負って歩く姿は登山家たちが街中での訓練として荷物を背負っているのと同じ姿であった。また、大学の研究室とハウスの往復にも四十分くらい歩いてきた。自転車も車も持っていないから、足を使うしかなかった。

この歩くという習慣が帰国後も継続しているのである。そしてある時刻になると歩きたくなくなるのである。もちろん爽やかな空気の朝、「今日は自転車で行こう」と勇ましくペダルをこぐこともあるが、どうも損をしている気分になる。確かに、職場まで片道四十分ほどで行くことができる。バス代金も節約できる。がしかし、帰りは自転車を職場においたままでは歩けないぞ、と思うのである。これって変かな？　こうなるともはや習慣とか慣れを超越して「癖」になってしまった、としか言いようがない。習慣と癖とは違う。癖は病的な習慣の進化系だと思う。癖なので誰がなんと言おうと歩きたい、歩きたくなるのである。

すっかり疲れた身体は嫌なことも忘れさせてくれる。いや忘れてはいけけない。嫌なこともさほど大きな面倒事ではないように思えてくるのである。歩けば、なんとかなるもんだ。いずれはどこかへ到着するということだろう。(二〇一三年九月七日、土曜日)

#### 64. 価格付けのまやかし

これまでの人生で三回目の利用だったろうか。今日、他大学(非常勤講師)での講義開始時刻前に十分な時間があつたので大学の近くにあるMos Burgerへ入ってコーヒとSポテトのセットを三二〇円で飲み食べた。私のような小父さんは注文することからして大変である。レジ前では若い女性がよどみもなくメニューを見ながら注文していた。その横で、私はメニューを上下左右に両目を動かしながら、どれにするか物色している。

どれを選べばいいのか分からず、とりあえずコーヒが飲みたくて入ったのであるが、今日は帰宅が七時前後になることから胃袋に何かを入れようと思いつつ、まだメニューを見ている。幸い、隣の女性客はまだ注文を続けている。テイクアウトするようだ。

一見、挙動不審な私を見つけた若い男性スタッフがレジの前に立ち声をかけてきた。

「ご注文はお決まりですか？」

えい、こんなときは無難に、

「コーヒーとセットになっているのはどれですか？」

と聞くと、メニューの右上に五つのパターンがあることを指で指し示した。

「セットであれば、こちらになります」

飲みものはコーヒーとセットになっているものがなくて、ウーロン茶、オレンジジュースなどであった。

「コーヒーとのセットはないの？」

「できますよ。ポテトのサイズはどれにしますか？ S、M、Lがあります。お持ち帰りです？」

「ここで召し上がりますか？」

「ここで食べます。じゃあ、Sでお願いします」

「ホットコーヒーでよろしいか？」

「はい」

「ホットコーヒーとSポテトのセットがお一つで三二〇円になります。この番号札を持って座ってお待ちください」

「はい」と応えて、私は四〇〇円を渡し、八十円のお釣とレシートを受け取り、

「こつちで食べてもいいですか？」

と訊ねると、

「そこらは喫煙室になっています」

というので、反対側のテーブルへ向う。

「ホットコーヒーとSポテトのセットが一つ入ります！」

スタッフは厨房へ向って元気よく声をかけた。

No14の番号札を持って、私は窓際のテーブルに座った。時刻は二時過ぎである。空いているテ

ーブルが多い。私の右隣では初老の夫婦がチキンナゲットをほおぼり、ウーロン茶を飲みながら世間話をしている。テーブル二つ左隣には中年の男性が三人、なにやら八千万円とか二億とか、割っていくらになるとか話している。耳を塞いでも、無用なほどの声量である。

さすがファーストフード店である。早いのが取りえである。座って二分も経たないうちに、まずコーヒーが届いた。すするように飲みながら、レシートとお釣りを確認する。

単品注文の通常料金であれば、

Sポテト 百九十、

ブレンドコーヒー 百二二〇、

合計四一〇円となる。

しかし、この金額の下に、

セット値引 (マイナス) 百九〇

という一行がある。合計三二〇円である。

きつとレジスターでは最後にセット値引きのキーを打つのであろう。

よく見るとお釣りの下の空欄には、

「通常価格よりも九〇円お得になりました」

という一文がある。

セット値引—百九〇の表示で分かりそうなものであるが、お得感を強調したいのか、右記の表現が印字されている。このご時世、この表現で本当に得をしたという感覚をもつこともないだろうが、この種の技を使って客の心をつかもうとしている。誰か心理学者が考えた工夫なのか、店の発想なのであろうか？

料金三二〇円には消費税十五円が内税になっている。来春、八％へ引き上げることが最終決断する日が近づいてきた（十月一日という報道がある）消費税は、内税でも外税でもいずれでもよい、ということの実施するようである。内税でお得感を強調するのか、外税であえて消費税の上乗せを強調するのか、料金の表示をめぐっても競争が展開されることだろう。

この文章の元原稿をテーブルで書き進んでいると、隣の席に学生風の五人組みが現れた。時刻は三時前である。講義が終わった時間帯だな、と思っていたら、

「いらっしやませ!!」

という声を発しながら女性スタッフが注文の品を壁に近いテーブルへ運んでいる。その目と合った瞬間、店が立って込んできたので、早く退散しろ、という沈黙の視線攻撃を受けたように思えた。小父さんは席を立ち、ドアを押し開け、大学へと向った。後で気づいたが、使用した容器等は客が指定の場所へ片付けるようだ。それを忘れてしまった。二〇一三年九月二十日、金曜日

## 65. ずぼらの勧め

オレオレ詐欺に始まり、還付金詐欺、未公開株購入詐欺など詐欺の被害に合う高齢者が後をたない。これはきつと生真面目という国民性が原因であろう、と考えた。

かかってくる電話には丁寧に対応する。相手の話は最後まで聞く。誰かからの依頼には真面目に対応する。

こうした習性を幼いころから身に付けてきた、いや付けるよう躰られてきた高齢者たちは勧誘に対して特別な違和感を抱かず、電話の主に誘導されるのかもしれない。もちろん、儲け話を鵜呑みにし、それに目がくらみ誘導される高齢者たちもいるだろうが。

詐欺対策。相手の依頼にはもつとずぼらに対応しよう。相手の話術を試すくらいこちらが頑固になろう。(二〇一四年三月二五日、土曜日)

## 66. どう答えればいいの？

交差点を自転車でも渡りきったところで、二人連れの男から呼びとめられた。

「はい、ちよつと、警察ですが、いま信号無視をしましたね」と言っ、年上らしい警察官が警察手帳をかざした。私服の警察官であった。

「ああ、二秒、早かったですかね」

「念のため盗難自転車でないか、確認をさせていただきます」

「どうぞ。ここに登録番号が貼ってありますよ」

「お名前は？」

「マ・ス・ダ・です」

若い方の警察官がジロジロと私の自転車を見ては、「カギも付いていますね。ランプは点きますか」と訊いてくる。

腹の中ではよけいなお世話だ、と思っただが、我慢、我慢である。相手は国家権力を行使できる立場にある。

「そんな時間帯には乗りませんから。これは息子が二年前まで使っていたものです。私服で、今日はなにかあったのですか」と訊き返すと、「近所で殺人事件があったので、その聞き込み捜査をしています」と素直に答えた。

さらに訊けば、私の勤務する大学をこの三月に卒業したそうだ。卒業学部は私の所属とは違っ

ていたが。

「ああ、確認が取れました」

「そうですか。ちゃんと息子の名前で登録されているでしょ」

「はい。信号は無視しないでくださいね」

「ああ、どうもご苦勞様です」と言つて、私はペダルをこぎ始めた。

「時間はとられたが、これでもしこの自転車に盗難にあつても、この登録番号が確かに有効であることが確認できたことは良かったかな」と思いながら家路を急いだ。

しかし、ちよつときつい上り坂にさしかかつたとき、ふと考えた。この場合、警察官に対して、私は「すみません」と言うべきなのか、「分かりました」と言うべきなのか。確かに、二秒早く道路へ自転車を出したのは事実だし、ルールも犯していることにはなる。それを親切に「信号は守りましょう」と忠告してくれているのである。日本的なパータナリズムの表れである。であれば、「分かりました」と答えるべきなのであろう。「すみません」は変だろ。警察官に謝っているのだから。「ルールは守れ」、と忠告されたのだから「分かりました」だろ。

一瞬、逡巡したので、私は「ご苦勞様です」と返した。が、どうも釈然としない。(二〇一四年五月十日、土曜日)

## 67. ご苦勞様？

少人数でおこなうゼミナールの授業が終ると、学生たちが、私に対して、

「ご苦勞様でした」

と声を掛けてくる。

「そうか？」

「ご苦勞様」というのは目上の者(城主)が<sup>わがま</sup>勞いの意図をもつて下の者(家来)にかける言葉じゃないのか？

午後三時から始まる授業前の廊下では「おはよう」という言葉をよく耳にする。学生に訊けば、その日のうちで最初に顔を合わせるときの挨拶らしい。これはアルバイト先で身に付ける習慣らしい。そうじゃないだろ。午後三時は good afternoon (こんにちは) だろ。

かつて、ゼミ生が私にこうした挨拶をしたとき、「私は、午前六時に起きて、大学へは午前八時に来います。午後の三時前まで寝ていたわけじゃない。午後三時の挨拶は「こんにちは」だろ。おはようございますって挨拶されると小バカにされたようで不快な気持ちになる人もあると思うよ」と論じたことがある。

さらに午後になつて、あるいは夕方に「おはやよう」って挨拶をするのは、一般的に「水商売の人たちのようだよ。ここは大学だからね」って教えるのであるが、この「水商売」の意味を知らないのである。

話を元に戻して「ご苦勞様」の件であるが、同僚にこの話をすると、笑みを浮かべながら「入学者を確保することが大変な時代になつているので、教える側よりも学生側の立場が強いんじゃないかな？ 我われは彼ら彼女らに来ていただいているのさ」と受け流されてしまった。

「そうか？」(二〇一四年五月十日、土曜日)

68. 特別展示 「ちよつと古いけど、まだ誰も借りていない本です」

久しぶりに、近所にある公立の図書館へ行ってみた。平日だというのに利用者で座席は埋め尽くされていた。雑誌コーナー、新書・文庫、単行本と棚を見て歩くと、柱の前後に真新しいスチール製の本棚が設置されていた。いかにも空いたスペースに置きました、という雰囲気である。本棚の上段に特設展示という張り紙がしてあった。その下に「ちよつと古いけど、まだ誰も借りていない本です」という案内文があった。そうか、ここに納品され、新刊本のコーナーで紹介され、さらに各分類番号の棚に配架されたのだけれども、ある決められた一定期間、まったく借り手がいかなかった本たちのようだ。想像するに、きつと閉架書庫にしまわれていた本たちであろう。そんな本たちに光を当て、借りてもらおう、読んでもらおうという図書館員のグッド・アイデアだな、と感心させられた。図書館やそこにある本たちは誰かに利用してもらって初めて値打ちが出るものだからである。

こうした誰にも借りられない本たちは四つの本棚に並べられていた。どの棚にも有名な著者の本がなん冊も顔を見せていた。中にはこんな作家もいるんだ、こんな出版社もあるんだ、と新たな知識を提供してくれたものもあった。

暗く陰湿そうな書庫から出してもらった、本たちの背表紙からは、

「立ち止まって、タイトルを見るだけで、どうせ借りてはくれないでしょ」

「ちよつと、立ち止まった方、私を借りてくださいよ」

「お願い、借りてよ、借りられないと、また書庫に閉じ込められちゃう」

と、つぶやく声が聞こえそうであった。(二〇一四年九月十一日、木曜日。道立図書館で見た光景より。)

69. なん歳から大人？

この質問には、私は税金を納める歳からだと答えたい。選挙権の年齢を十八歳に引き下げようが、税金を納める立場にない若者は多くいる。中学を卒業して働き、税金を納めている若者たちもいる。彼らは早くから税金を納めることで国や社会に貢献をしている。

事実、三十三歳で定職に就いたとき、私は「やつと税金を納められる身分になれた」という深い感慨を覚えたことがある。(二〇一六年一月十三日、水曜日)

70. 大切なものであっても、それほど大切には扱われていない

世の中には救いようもない深刻なことなどありえない。なぜなら、あの聖書(Bible)でさえ、破けたり、傷んだり、古びたりして、不用になった後の処理の仕方について定説がないのだから。ちなみに、次のような処理方法があるようだ。

一. 綺麗にラップして焼いてしまう。その灰を教会の庭に撒く。

二. 家を新築する際に、壁に埋め込んだり、床板の下に置く。

三. 誰かの棺に入れる。

四. 廃品として出す。いずれ土へ返される。(二〇一六年一月十四日、木曜日)

参考文献 『Asahi Weekly』 Sunday, December 13, 2015.

71. 末っ子どうし

末っ子どうしの夫婦はいいときはいいけど、なにかピンチに遭遇すると脆いもんだ、ということとをどこかで読んだことがある。

私も実感している。

ピンチになると互いに感情をあげけ合うところがあるようだ。どちらかが長男、長女の立場になれないのである。

でも、しょうがないよな。結婚したんだもの。互いに認め合わないと……。

こんなことを解かる自分を認識できるのだから、自分も立派なもんだ、と考えることにした。だって、相手は変わってくれないのだから、自分が変わらなきゃ。(二〇一六年三月十六日、水曜日)

72. 中毒財

登場人物。ゼミナル担当教員、学生(阿部君、男子A君、女子Bさん、Cさん、男子D君、女子Eさん。)

—ゼミナル室。ホワイトボード。長机を口型に配置。

教 今日のリポータは誰かな？

阿 はい。私です。

教 おお。阿部君かあ。先週は欠席してたな。体調、どうだ？

阿 はい。すみませんでした。風邪をこじらせてしまつて……、でも治りました。

教 そうかい？ 季節の変わり目だから、気を弛めると、風邪も引くよな。

阿 (立ち上がり) すみません。レジメと資料を配ります。一部ずつ、取ってください。

教 (全員の顔を見て) よし、じゃあ、始めよう。

阿 (A四版用紙を手にとって) はい。今日のテーマは人間の性格と中毒財への需要との間に一定の関係があることを説明することです。最初に人間の性格をせっかちなタイプと我慢強いタイプに分けます。中毒財というのは酒、タバコ、ギャンブルのように一度、はまると抜け出せないくなる依存性の強い嗜好品やサービスのことです。あくまでも病的な依存性です。この両者の間には強い相関関係がある、とテキストには書いてありました。

教 そうだね。まず、せっかちとか我慢強い性格って、どう説明されていましたか。

阿 せっかちっていうのは目先の利益を重視して、大切なことを後回しにする性格のことです。

我慢強いはその逆です。

教 もうちよつと、具体的に言う……。

阿 はい。たとえば、タバコであれば、健康に良くないことは分かっていますが、いま一本吸うことによつて得られる高揚感と吸わないで我慢して将来健康に過ごすことを比べて、せっかちな人は我慢できないから、健康を害することは考えないで、いま吸ってしまうことです。

教 そうだね。阿部君はどっちの性格かな？

阿 はい。どっちかといえば、せっかちです。

教 そうかい。A君。この説明で分かるよね。

A はい。たとえば、夏休みの宿題を早くやつてしまえばいいものを、目の前にある遊びに夢中

になって、休みの終る一日二日前に慌ててする、ということですかね。我慢強い人は遊びを我慢して、すぐに宿題にとりかかるとか。

教 そうそう、せっかちとは将来よりも、いまを重視する行動パターンをとる人のことだよ。Bさん、どう？

B はい。稼いだアルバイト代をすぐに使ってしまう人はせっかちで、少しでも貯金をして利子を手に入れようとする人は我慢強い人です。今よりも将来を重視しているから。

教（感心したように）そうです。うまい説明だと思います。じゃあ、この二つの性格と依存性の強い財サービスの消費との関係はどう説明されますか。

阿 はい。テキストでは、せっかちな人ほど、中毒財に溺れる傾向がある、と書かれています。

教 うん。少し補足します。昔の言葉で、飲む、打つ、買う、と言えるね。酒やタバコは過去の飲酒や喫煙量が多いほど、今日の一杯、一本を美味しく感じる。同じように、今日の一杯、一本は明日以降の酒やタバコをさらに美味しくさせる。ギャンブルだって一度の勝ち体験が、次に一層大きな高揚感をもたらす。こうして依存症になっていくんだ。それを中毒財と呼んでいる。

中毒になっている人にとっては必需品になっていることと同じだよ。だから、これは学問的には需要の価格弾力性で表現できる。（ホワイトボードに書く）定義はこうだった（注）。一年生のときに習ったよね。中毒財は、価格が上がっても、その消費量を大きく減らすわけにいかないから、この値は小さくなるんだ。中毒財に限らず、塩や水のような生活必需品がこれに該当するよね。よし、もう少し進めよう。

阿（別の用紙を手にとって）はい。配った資料を見てください。中毒財というのは、食べたり飲んだり、利用したりする物やサービスだけでなく、働く面においても観察できます。テレビや新聞で日本人の過労死やサービス残業が話題になっています。そこで、労働時間と仕事の達成感や非金銭的な満足度との間にプラスの相関関係があるというデータを見つけました。資料のグラフを見てください。

法定労働時間は週四十時間ですが、週五十時間をこえて働くとメンタルヘルスが著しく悪化する傾向が見えます。そして、週五十五時間を超えるあたりから職場で必要とされている感覚や達成感という非金銭的な満足度が指数関数のごとく上昇しています（『朝日新聞』、二〇一七年四月二十二日参照）。このことから長時間労働やサービス残業にも中毒財の性格があると言えます。

B すみません。説明の途中ですが、質問があります。サービス残業は割増し賃金をもらわないまま働いているわけだから、さっきのせっかちということからすれば、必ずしも中毒財ではない、と思いますが。

教 阿部君。どう？

阿 はい。その意見は一部分、正しいと思います。サービス残業になる前の一定の時間は割増し賃金をもらいますので、せっかちな人は余分にお金が欲しいから、明日の疲れ、健康のことを考えないで、いまのお金＝残業を重視していると考えられます。

教 そうだね。だいたいそんな理解でもいいよね。最近、サービス残業が社会問題になった事件があったよね。知ってるかい？

A はい。電通の若い女性社員が過労が原因で自殺した事件ですよ。

教 そう。あのケースはせっかちなんでいう個人の性格が問題ではなくて、会社の体質自体に非があったよね。組織にコミットする機会や時間が多いほど貢献していると錯覚する者もいる。そのため本来、自分がすべきことを見失っていることだってある。

よし、じゃあ、テキストにある統計データを説明するかな。この表は縦に読みます。喫煙習慣と飲酒習慣、ギャンブル習慣、さらに外食支出比率、負債との間には強いプラスの相関関係がある。また、せつかな人ほど喫煙習慣がある。タバコを吸う人は酒もギャンブルもやっていて、外食に使うお金も多く、そのうえ、負債を抱えている。すべて、いまの享楽を重視していることが統計的にも証明されたってことですよ。

C すみません。先生。質問ですが。

教 じゃあ、レポータの阿部君にしなさい。

C タバコを吸っている人、タバコに依存している人って、どれくらいいるのですか。

阿 はい。二〇一六年でみると、成人男性で二十九・七％、約一五〇〇万人いるそうです。成人女性だと、九・七％でほぼ横ばいに推移しています。

D ギャンブルの市場規模は？

阿 ええっと。二〇一五年では、パチンコ・パチスロに限定すると、その市場規模は約二十三・二兆円でGDPの約四％にあたります。一万一三二〇店舗あるそうです。

D そんなに大きい規模なんだあ。

教 そうそう。パチンコの市場規模が大きいのは有名だよ。日本人は忙しい忙しいと言っては、パチンコ屋へ通っているんだ。はっはっはっ。

D で、パチンコやパチスロが中毒になっっている依存症の人って、数ではどれくらいいるのかな？  
阿 推定だけど、全国に約三十九万九〇〇〇人いるそうです。でね、問題なのはこのうち預貯金のない人が四十八％もいるんだ。また離婚経験者は三十八％いるんだ。

D ちゃんとした社会生活ができていないってことじゃない。中毒になるくらいなら、お店がパチンコの出玉を制限すれば、射幸心も大きくならないでしょうに。

阿 その点は法改正が進められているよ。

E 出玉を規制する法律があるんですかあ？

阿 うん。風俗営業法施行規則に載っているそうなんだ。

E 具体的に、どうしようとしているのですかあ？

阿 改正法では出玉の数の上限を今の三分の二に抑えるそうです。

D 金額でいうと？

阿 金額だと、大当たりの出玉の上限は二四〇〇〇個で九六〇〇円くらいになる。それを一五〇〇〇個、六〇〇〇円くらいにまで引き下げるんだ。

C そうなんだあ。でも、どだいそんなに勝てるのかな？

阿 うん。それも調べたけど。パチンコ依存症問題に関わる団体の調査によれば、相談者の約七割は一カ月当たり、少なくとも五万円を失っているそうだよ。

C ええっ。そんなに負けてんだあ。

阿 だから、客の標準的な遊技時間とされる四時間で五万円の玉が出ないように出玉の基準を計算してみたんだよ。

A でも、そんな法改正をしても、依存症は緩和しないよ。だって、依存症は病気だから、出玉を減らしたところで、治るわけがない。

教 そうだね。勝てないと思っても手を出すのが依存症だからね。ここで、ちょっと視点を変えよう。中毒財をタバコに限定すると、受動喫煙が社会問題になっているよね。阿部君。調べたかい？

阿 はい。資料には載せてませんが、データは持っています。

教 じゃあ、紹介してよ。

阿 受動喫煙によって肺がんや脳卒中などに罹り、余計に掛かった医療費が二〇十四年度で三二二三億円になるそうです。内訳をみると、肺がんにかかる人は約一万一〇〇〇人で三三五・五億円、脳卒中は約十二万九〇〇〇人で一九四一・八億円、虚血性心疾患が約十万一〇〇〇〇人で九五五・七億円だったそうです。タバコを吸っている本人の医療費も一年間で一兆一六六九億円になるそうです。また、受動喫煙での死亡者数は年間一万五〇〇〇〇人と推計されています。

E そんなに多くの人たちが受動喫煙で死んだり、医療費がかかっているのですかあ。

B 私は、タバコを吸ったこともないし、両親、兄や友達も吸っていません。A君、どうなの？

A 僕は一回だけ、一本吸いかけたけど、自分には合わないと思って、それ以降、手にしたこともないよ。先生はどうですか？ 吸ってますか？

教 いいえ。私も二十歳のころに、一箱買って一本だけ、口にしましたが、これは合わないと思い、捨てたよ。だから、吸っていない。

E 国の社会保障費が毎年、一兆円規模で増えているって聞いたことがあるけど、喫煙を減らす対策はとられているのですかねえ。

教 阿部君。どう？

阿 はい。国は健康増進法という法律を改正して、受動喫煙を二〇二〇年までにゼロにしようとしています。この法案は国会で成立しませんでした。

C 具体的に、どうしようとしているの？

阿 たとえば、飲食店での喫煙を原則禁止にするとか、すべての公共施設には分煙設備を設置するとかいうことです。東京都は率先して導入することを考えているそうです。

B 私、思うのですが、コンビニなんかに自販機を置くのを禁止すべきだと思います。二十歳になると簡単に買うことができるので、若い人たちが吸ってそれで中毒になるのだと思います。

阿 うん。そういう意見もあって、とくに未成年者が簡単に手を出さないよう、売る側でルールを作るべきだって。それに小学生のときからタバコや酒、そしてギャンブルの害について、もっと教えるべきだと思うよ。一度、覚えたら、本当に依存してしまうものなので……。

A タバコの税金を上げて、すべての銘柄を一箱五〇〇〇円以上に設定するということもあり、ですよね。

D 僕も大賛成です。

阿 A君！ D君！ 五〇〇円は高すぎるよ。

E もっと酒税を引き上げてくれてもいいわ。私はアルコールを飲めないから。

阿 Eさんは飲まないからいいかもしれないけど、アルコールの大好きな人にとっては酷だよ。

D パチンコやパチスロだって、もっと（遊戯）料金を上げれば、お金を持っていない若い人たちの利用も減るんじゃない。あるいは一日に使える料金を規制するとか。

阿（不満そうに）D君はパチンコやパチスロに関心がないから、そんなことが言えるのさ。どだいトータルでみて勝てない、こんなゲームで、さらに料金を上げてほしくないね。

教 そうだな。いま話題になっているものはすべて嗜好品だけど、常に増税が叫ばれる。でもねえ。国にとってはタバコやアルコールからの徴税収入は大きいんだ。だから、むやみに税金を上げて、消費量が減るのも痛し痒しってところかな。パチンコについては店の価格戦略もあるけど市場規模からすると、もっと引き上げていいかなあ。いずれにしろ、価格弾力性をどう推計するかにかかっているね。阿部君。怒ったような顔して、どうしたの？

阿（大きな声で）先生！ パチンコだってカラオケでお金を使うのと同じようなもんじゃないですか。

教 そんなことはない。阿部君も知ってるだろ？ 依存症になって人生を棒に振ったり、親がパ

チンコに夢中になっているあいだに、車の中に寝かせておいた赤ん坊が熱中症で亡くなったり、と結構、パチンコにまつわる事故もあるんだよ。それにさつきも話題になったように預貯金がなかったり、離婚をしたりとパチンコに関する社会問題もたくさんあるから。

阿……。

教 さて、時間も少なくなってきたけど、阿部君、今日は詳しく調べてきてくれたね。とても良かったと思うよ。ところで、君が欠席した先週、話題になったんだけど、君は単位がまだ五十単位しか取れてないって、本当かい？

阿（気まずそうに）はい。今年、頑張れば、九十単位にはなります。

教 二年間で平均二十五単位しかとれない人が一年で四十単位も取れるかい？ 下手すれば二年留年だな。毎日、授業に出てる？

— 他のゼミたちは、呆れたように目に薄ら笑いを浮かべて阿部君をみつめる。

阿 バイトで帰りが遅いときは、翌朝起きられずに欠席することがあります。

教 バイトかあ。君は自宅から通っているよな。生活費はかからんだろ？ バイトで稼いだ金はなにに使ってるの？

阿 パチンコとゲームです。

教 どちらも好きな学生は多いよねえ。何年前に休学をしたという学生にその理由を訊くため、面談をしたことがあった。その学生はいわゆるパチンコ依存症だったな。それを治すために半年休学をして、専門家のカウンセリングを受けるって言ってたよ。ゲームも同じで小学生の中には依存症になっている子が多くいるみたいだ。

阿（不安気に）休学ですかあ。

教 うん。で酒はどうなの？ 飲むのかい？

阿 大好きです。

教 タバコは？

阿 一日二箱、必ず吸ってます。

教 んん。すでに中毒だあ。飲む、打つ、吸う。なるほど、そっかあそっかあ。今日のレポートは実体験に基づいてたんだなあ。

注1。需要の価格弾力性の定義は以下のとおりである。

$$\begin{aligned} e &= -\frac{D_2 - D_1}{\frac{D_1}{P_2 - P_1}} \cdot \frac{D_1}{P_1} \\ &= -\frac{\Delta D}{\frac{\Delta P}{P_1}} \cdot \frac{P_1}{D_1} \\ &= -\frac{\Delta D}{\Delta P} \cdot \frac{P_1}{D_1} \end{aligned}$$

ただし、 $P_1$  は最初の価格、 $P_2$  は上がった後の価格、 $D_1$  と  $D_2$  はそれぞれ  $P_1$  と  $P_2$  に対応する購入量（需要量）である。

中毒財や生活必需品は価格が上がっても、その消費量を大きく減らすことができないので、この値は  $e^{<1}$  小さくなる。

$$\left( \frac{P_2 - P_1}{P_1} \right), \quad \left( \frac{D_2 - D_1}{D_1} \right)$$

注2。受動喫煙については『朝日新聞』二〇一七年五月七日、六月一日・三日・二十一日、九月九日、パチンコの出玉規制については二〇一七年七月十一日、八月二十五日（施行は二〇一八年二月一日と決定）を参照。（二〇一七年六月二十一日、水曜日、晴れ）

### 73. お通夜

— ある大学で教授がゼミナールの目的を論じています。

ゼミナールとはラテン語で“種”という意味です。なので、この教室は私から何か確かなことを伝授する場でなく、答えらしきものが与えられる場でもありません。ゼミナールの目的はみなさんが知識や知恵の種を蒔いて、それを個々人が育てて大きくすることです。みなさんが主役です。私は進行係りにしかすぎません。どんどん自分の意見や感想を出すようにしなさい。今日のレポータは誰かな？

「はい。私です」

福本君かあ。じゃあ、はじめろぞ。

「私が担当した章は、生まれ月と学歴、さらに年収との関係が書かれていました」  
簡単に要約しなさい。

「はい。日本では四月一日に満六歳になっていると小学校へ入学します。これを学齢と呼んでいます。それとは別に相対年齢という概念があつて、小学校へ入学する六歳になるタイミングが大切だそうです。一〜三月の早生まれの子は四月二日以降生まれの子よりも約一年早く入学することになります。遅生まれの子がその一年という期間中に身に付けた社会性、学習能力と運動能力が入学後に優位に働くことがあるそうです。そこで、大卒の人の生まれ月を調べてみると、四〜六月生まれが多く、かつ年収も高いそうです。なので、学歴や年収の格差にも小学校へ入学する時点での生まれ月が影響している、と考えられているそうです。また、四〜六月生まれは理数系の科目が得意だそうです」

はい。だいたい、そういうことが書かれていたよね。じゃあ、これについてなにか意見や感想を出してください。なんでもいいよ。どうぞ。

「……」

レポータ以外のみんなも読んできているはずだから。六人もいるのだからなにか感想だけでもしゃべりなさい。A君。どうだ？

「……」

うん。黙ってないで……。君は何月生まれですか。

「十月です」

そうか。どうだ。四〜六月生まれの人の学歴や年収が高いということだけど。どう、思う。

「……」

なにも感想ないかあ？

Bさん。あなたは何月生まれですか？

「四月一日です」

ほくっ。ちょうど、六歳になった日に学齢に達して入学したんだね。

「でも、ウソみたいな日付だつて、バカにされたことがありますけど」

そんなことは気にすることないよ。どう。感想、言ってください。

「……」

C君。どうかな。何か、しゃべってくれよ。

「……」

D君は？ 君の声を三週間ほど聞いていないぞ。何んでもいい、感想を言いなさい。

「……」

E君。ずつとうつむいたままだけど……。何か、感想ないかい？ 君、数学が得意だろ。なん

月生まれだ。

「一月です」

そっかあ。テキストの主旨に反しているな。それじゃあ、G君。どうだ。読んできたんだろ。

君もほとんどしゃべらないなあ。何か、言いなさい。

「……」

感想もしゃべれないのじゃ、ゼミにならないよ。ゼミは議論する場だつて毎回、言ってるでしょ。この場でしゃべる訓練をしておかないと、あなたたちは今三年生で来年、就職活動をするときに面接で困るぞ。今は面接重視の時代だから。それじゃあ、レポートの福本君、君はどんな感想を持ったかな？

「はい。ここに書いてあることが正しいならば、自分は十二月生まれなので、親に文句を言いたいんです。四く六月に生んでほしかったと。そうすれば、もつといい大学へ入学できたろうし、将来、高い年収を稼げるだろうに」

福本君。ここに書いてあることがすべてではなくて、努力したからいい大学へ入学できたし、頑張ったから高い年収を稼ぐことができているんだ。何もなくて四く六月生まれが有利だというのではないよ。ご愁傷様だな。他の人たち、何か意見や感想を出してくれないかな。

— こんなふうに意見や感想の出でこないゼミナールが続いていた。教授は呆れて言った。

お通夜みたいなゼミだな。主役は君たちだぞ。何か一言、しゃべって帰りなさい。

— 教授は考えた。

君たちがしゃべってくれないので、課題を出すよ。きつとレポート以外はテキストを読んでくれないのと思う。なので、来週から、全員が各章を四〇〇字以内で要約したものを提出しなさい。原稿用紙に手書きで横書きにすること。分かったね。

— それでもお通夜は続いた。教授は顔には出さず、心のなかで業を煮やし、さらに課題を与えた。

夏休み前の七月十八日のこの時間にレポートを提出しなさい。テーマは自由に設定していいから。書く要領は配布した文面に従いなさい。これから一カ月後の提出だから、まとめる時間は十

分にあるからね。提出したレポートを使って、みんなで議論するから。提出しないと、ゼミを進められないからね。必ず、作成して、持ってきてきなさいよ。

― 提出の当日。

「持つてくるのを忘れました」

「私は清書の途中です」

「提出は来週だと思ってました」

― 教授、思わず大声を上げる。

その三人は破門だ！ 後期、もう出席しなくていい！

すると、レポータになったときにしかしゃべらないD君が両隣にいるC君とG君にまじまじに互いに耳打ちした。それを目に留めた教授はD君に詰問するよう言い放った。

なにか文句があるかい？

D君はみんなに聞こえる声でポツリと答えた。

「僕たちの出棺ですね」(二〇一七年六月二十八日、水曜日、晴れ)

74. 小言？ アドバイス？

― ある大学三年生と教授との会話より。

教授 なぜ、勉強をするのか解るかい？

学生 他人よりの優れた能力を身につけて、給料の高い職に就くためでしょ。

教授 そつかあ。そんな気持ちで大学へ通っているのか。そうじゃないと思うぞ。

学生 学歴差が経済格差に反映しているって言われてるじゃないですか。

教授 う〜ん。お前の持論だと言われるかもしれないが……。勉強っていうのは人生を楽しく過ごすためにしてるんだと思うよ。

学生 教養が身につくってことですか。

教授 それもそうだけど。例えば、韓国語でコミュニケーションができれば、韓国人とも友人になれるし、互いに文化や慣習の違いを理解できて楽しいだろ。そうすれば、互いに大きな争いもしなくなるし、みんなの心が豊かになるじゃないか。だから、外国語を勉強していいよ。金儲けにばかり結びつけちゃうと勉強すること自体が楽しくなくなるよ。

学生 それで、先生、公務員試験を受けるのを止めようと思うのですが。

教授 どうして？ 君は入学してきてから、一貫して受験勉強してきたのだから？ 今、十一月だよ。試験は来年の四月の中旬から始まるのだから？ もう、ギブアップしたのかい？

学生 いえ、そういうわけでもないのですが。図書館にこもって、毎日、勉強をしても虚しさを感じるのですよ。

教授 あはっはっはっ。笑っちゃいかんが、そうだろうな。決まった答えが出せるよう訓練してるだけだから。でも、どんな受験勉強もそんなもんだよ。何年前のゼミ生で、三年間公務員試験の対策をしてあげただけど、受験する前の年の十二月に受験しないって、言ってきた学生がいたよ。鍛えればまだまだ伸びそうだったので予備校にも通わせただけだね。本人もやる気満々で受験すればどこかの公務員になれるくらい学力を身に付けさせた

けど、いざ受験をする段階になって民間に鞍替えをしたんだ。さすがに私も腹が立って、叱ったよ。

「なぜ、受けないんだ。土壇場になってリスクが取れないのなら公務員になりたいなんて安っぽい宣言をするな！」

私も受かるよう精一杯サポートしてあげたから、愛情の裏返しというか、期待が大きかった分だけ、落胆が怒りになったんだ。

学生 でも、ほんと、専門科目の問題を解いてると虚しくて……。

教授 そういう勉強よりも、どんな本でもいいから真剣に読む訓練をするといいいけどね。悩みの答えを探すのではなく、自分の頭で考えて、答えを創り上げる力を養うことができると思うよ。本当は、この時期には卒論を書く準備をしたり、レポートを書くといいいんだけどねえ。君たちの年頃は体力もあって、頭も柔軟だから思うほうの想像力と創るほうの創造力が一番充実しているときなので、潜在能力が一気に開花するころなんだけどな。マニュアル本を読んで、決まった答えを出す訓練をしてるだけだから、そりゃあ、虚しいし、つまらないわな。

学生 そうなんですよね。大学受験の延長みたいで。……先生、大学の教員って年収が一千万円を超えていますよね。

教授 なんだ、藪から棒に。それは所属する大学の財政力によるよ。みんなが高級取りじゃない。事実、私はそんなに稼いでないよ。

学生 大学教員にも興味がわいてきまして……、民間であれば大手の不動産業ですけど……、公務員と比べて……。

教授 比べるって、年収かい？

学生 はい。民間は景気にも依存しますが、退職金まで含めた生涯所得でみると公務員が一番高いのですよ。

教授 そんなことに興味があるのかい？ じゃあ、これまでどおり、公務員を目指せばいいじゃないか。受験勉強ばかりしてるから疲れてくるんだ。たまには小説でも読んでごらん。生きる知恵を見つけたこともできるから。

学生 大学院への進学はどうですかね。大学の教授職は安定してるし、時間の余裕もあって、年収も高いようですし。

教授 そんなことはない。入学定員を充たせない大学は給料をカットされてるよ。それに、時間だって余裕ないよ。講義の準備をして、問題を抱えている学生への指導もし、毎回会議に出席して、学会の雑用もこなし、それに自分の仕事をしなきゃならないからね。どだい進学しても、すぐには職に就けないよ。いいかい、大学院へ進学すれば最低五年間は奨学金以外の収入はない、と思わないと。それが最短だから。私なんか、三十一歳でようやくこの職に就けたのだから。今はこの大学も経営のことを考えると簡単にパーマネントの教員を雇えなくなっているよ。大学院を修了して二十年以上研究職に就けず、非常勤講師で食いつないでいる研究者たちがわんさかいる時代だよ。そんなリスクを取れるかい？

学生 いやです。

教授 リスクを取れないと何も前進できないぞ。私がこの世界に入ったきつかけは第一次オイルショックを体験したからだよ。大学入学時だった当時、狂乱物価でインフレの根源を解明し、それへの対策を立案することが社会問題となっていたんだ。ハイパーインフレの根源が大企業の価格づけにあるということ、私は価格（マークアップ率）の決定要因に興味があって、大学院で解明してみたかったんだ。将来、大学の教員になれば、年収がどうの

こうのとは考えなかつたよ。ただ目の前にある経済問題を自分でも解明してみたいっていう思いだけで進学したけど。色んな選択肢があるように思えるから不安になるし、迷うのは当然だろうね。でも、迷えるって幸せなことじゃないか。

学生 入試に必要なミクロ経済学やマクロ経済学の専門的な問題も解くことができますが。公務員受験の勉強をしてれば、自ずと解けるだろうね。でも、研究者ってそんなもんじゃないぞ。研究するのは、車に乗れば五分で着く場所へ、あえて徒歩で九十分かけて周りの景色を観察しながら行くようなものだよ。目的地よりも途中の景色の中に色々と教えられることがあるんだ。それに一つの研究テーマで楽しいと思える瞬間は二回しかないよ。

学生 えっ？

教授 まず、論文のアイデアが浮かんだとき、次が完成した論文がレフェリー付の雑誌に受理されたときだよ。この二つの時間の間ですべてつもなくシンドイ努力に耐えなければならぬんだよ。むしろ、その時間を楽しめるくらいでないと。苦多くして、楽少なしだよ。

学生 苦しいのは嫌です。

教授 そうだろうね。これは重要なアドバイスだけど、君にとって楽な道と苦しい道があれば、あえて苦しいほうを選んでごらん。得るものは多いから。人間は苦しんでいるときが一番成長するときなんだ。これもリスクの取り方の問題だな。でも、もつと大切なことにはなにか社会経済問題を解明して世の中に貢献したいという気持ちだよ。多くの先生たちは年収が高いからという動機でこの職に就いているわけじゃないと思うよ。みんな研究を通じて世のため人のために貢献したいんじゃないかな。金は二の次三の次だよ。……いや、そうでもないか？

学生 でも、生きていくうえで金は必要ですよ。

教授 当たり前だ。金がないと選択肢が狭くなることもあるから。君だつてご両親が授業料を払えるくらいのお金を持っているから、こうして大学へ通えるわけだよ。でも、人が仕事を選ぶって金が基準なのか？ そうじゃないだろ。人生観じゃないのか。自分の人生観と一致する仕事に就ける人が幸せなんだろうね。ようするに、大学を卒業後、どういう人生を歩んでいくのか、をこの際、真剣に考えてごらん。私は君の人生観を変えるつもりはないから。自分で悩んで答えを出すしかないんだよ。今が悩むチャンスだと思うよ。

……

学生

人生には順番はないからね。いつ死ぬか分からない。死ぬときに後悔しないよう、やりたいうことを責任をもつてやり通し、生きるのがいいんじゃないかな。金のことを考えると生き苦しいことばかりだぞ、きつと。私も今年で六十一歳になるけど、自分の計画通りに実現する人生など皆無だと思うよ。人は予期せぬ出来事にうまく対処し、ときには闘い乗り越えながら置かれた環境を変え、自らも変わるきっかけにしているように感じるよ。振り返ってみると、どんな経験も無駄にはなつておらず、真つ直ぐな一本道を歩んできたと思えるけど。

学生 我が道を行くです。

教授

威張るようだけど私が若い頃の自分を偉いと思えるのは、自分に掟をつくったことだよ。それは進むか留まるかと迷ったときには必ず進むほうを選んだことなんだ。つねにポジティブに動くことを自分に課し、たとえ嫌でも進むほうに自分を向けていったことだよ。進まないで後悔するよりも、進んで失敗したほうがいい。失敗は貴重な経験として残るから。次のステップに必要なとき。もつと言えば、人生は、若い君にとっては足し算で、私のように年を取った者には引き算なんだよ。でも人間、いつかは死ぬ。だから若くても、

人生の終わりを想定し、そこから逆算して考えてみることも大切だよ。たとえ答えが出ないとしても、死を考えることは、今を生きる感覚を高めることにもなるからね。

学生 死ぬことですか？ 想像できませんね。

教授 そうだろうね。金といえば、世の中には年収二〇〇〇万円よりも一二〇万円を選ぶ人もいるから。

学生 そんな人がいるのですか？

教授 いるよ。世の中には色んな人がいるから。金持ちだとか、幸せな人を羨むのはその人の背後にある部分を知らないからだよ。みんな悩んで努力してるんだ。例えば、大きな病院に勤務している医者であれば、高給を得られる。しかし、つねに組織の軋轢に悩まされる。そんな悩みを抱え込むくらいなら、医者の原点に戻って、貧しい国で医療を受けられない人たちのために、自分の知恵や技術を活かそうという人もいるんだよ。誰が聞いても羨むような商社や広告、マスコミに就職しても自分の人生観にそぐわないことを知り、辞めて農業を始める人もいる。伝統的な時計職人になったOBもいた。どんな仕事もみんな世の中の役に立つ立派な仕事だよ。「籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」って言うだろう。一〇〇人いれば一〇〇人の人生観があつていいんだよ。ようするに生きている自分は何でもって世の中に貢献できるのかを最初に考えるべきだろうね。まっ、色んな本を読んだり、色んな人と話をして自分という人間の本性を見究めることだな。

学生 あえて高い機会費用や取引費用を選ぶ人もいるということですね。

教授 そうだよ。公務員だって、受験浪人をしている人もいるくらいだからね。人生、どう生きるかだよ。他人がいくら稼ごうがそんなことどうでもいいじゃないか。自分はどうしたいんだよ。

学生 ちゃんと考えたことないです。

教授 今の若い人は自分のことを他人に考えさせるよな。これって余りにも自分の人生に対して無責任なんじゃないかな。自分の人生なんだから自分で考えて行動すればいいじゃないか。君が選んだ仕事の中で最大限、努力してればそのレベルにおいて周りには応援してくれるだろうし、サポートもしてくれるよ。そうさ一〇〇%、勇気、もう頑張るしかないよ。

学生 ……先生はほんと優しいですよ。

教授 どうして？ 嫌味や皮肉ばかり聞かされて学生たちは嫌だろ。

学生 いいえ、慰めてくれたり、親切にしてくれるよりも、険しい未来へ押し出してくれるアドバイスをくれるからです。本当は険しい方向へ進みたいのだけど、リスクのことを思うと不安で進めないのです。

教授 よく分かっているじゃないか。悩みとか不安というものは、もつと先へという気持ちがないければ現われてこないのよ、ポジティブに考えるべきだよ。人生にはここで動かないと終わりという覚悟を決めなければならぬときが一度や二度は必ずあるから。英語で言えば、「It's now or never」(今しかない)だね。

学生 そういう指針みたいなことをアドバイスしてくれる大人がいないのですよ。

教授 そっかあそっかあ。君の周りには私のような小言幸兵衛こごんやへいゑいさんがいないんだな？ 膏葉と親

の小言は後から効いてくるって言うなあ。あはっはっはっでも、金かあ。そうだよな。金といえば、就職したてのころを思い出すよ。ある老教授から言われた一言を。

「論文を書いても偉い人にはなれない」

学生 有名人になれないってことですか？

教授 いいや、「偉い人」とは、学内でお金を稼ぐ人のことだよ。

学生 どういうことでしょうか。

教授 論文を書くよりも学内行政に精通する人物になれば、役職にも就け、お手当てが入手できるってことだよ。

学生 お手当てですか？

教授 そう。この点、私も△△長を複数年やらせていただいて、ずいぶん、金銭的には助かったよ。当時、子供たちが大学生になったばかりで、月給の半分が仕送りで消えてしまっていたのですね。ああ、このことかかって理解できたけどね。

学生 教授って論文を書くのが仕事じゃないのですか。さっきの先生の話だと勉強が好きでなければ務まらない仕事ですよ。

教授 そうだよ。でも、自分が年を取って、論文のアイディアも浮かばなくなり、また気力も薄れてくると、この一言の意味が理解できたよ。昇格前にのみ論文を書いて早めに教授になつてしまえば、後はもう上がりようがないので、行政に精力を使うか、それとも研究者になりたかった若い頃の気持ちを持ち続けて、論文を書き続けるか。この一言は金と学問を天秤に掛けているようで、嫌な気分になつたけどね。

学生 お手当でってそんなに高額なのですか？

教授 これもその組織によるよ。FRINGJ・ベネフィットだから。

学生 そうですか。そんな気持ちの先生方もいるってことですね。

教授 そうだ。私なんかは、出来が悪かったので、恩師から「大学では教育も大切だけれども、まず専門家に認められる論文を書きなさい。それが教育に反映され、さらに世の為になれば最善だよ」と諭されてきたので、老教授のこの一言は就職をして日の浅かった私には理解できなかったよ。ほんと。

学生 じゃあ、あれですか。学者になつても儲かる保証はないってことですかね。

教授 そうでもないよ。収入と論文数とが比例の関係にある教員もいるよ。有名になつてテキストを書けば儲かるよ。でも、一般的には反比例の関係にある。

学生 なぜですか？

教授 論文を書いている人は雑事に疎くなるので、稼ぐ機会を失うのさ。論文を書かない人は時間之余裕があるので、雑事に敏感になって、その処理能力を磨き、情報収集に長けてくるんだ。これは周りを見ていて実感するよ。でも、さっきも言ったけど、こんな偉い人になれる職も極めて狭き門になっているんだ。リスクを取れるかい？

学生 こりゃあしつかり選択しないと、えらいことになるな。

教授 そうだろ。(二〇一六年十一月八日、火曜日、大学のPCで入力)

## 75. 黒と白

黒と白、犬の呼び名ではない。

雪を冠ぶった樹の上で何やら生き物が咆えている。

今日は大寒の入り日である。

暦は正直である。

ただただ雪が多い、ただただ寒い。

獲物のいないこの季節、黒は白い世界でも生き延びている。(二〇一三年一月二十日、日曜日)

76. 巨人、大鵬、玉子焼き

巨人・大鵬・たまご焼き、の大鵬が亡くなった。

この三つの語呂合わせは一九六〇年代を象徴している。

勝負のみにこだわりスター選手を揃えたプロ野球の巨人。

裸一貫一人で勝負にいどみ続けた相撲の大鵬。

どちらも向う先に敵はなしというほど強かったが、その強さの源泉は違った。

大鵬は巨人と並べられるのが嫌だったとも聞く。

語呂合わせの次点に置かれたことも不満であったろう。

そんな強い者たちにあこがれた子供たちの大好きな食べ物が玉子焼きだった。

ちよろど卵の生産量が増え始めた時代でもあった。

順番はどうあれ、巨人と大鵬の対峙を和らげているのが、玉子焼きであるように思える。(二〇一

三年一月二十日、日曜日)

77. 額縁に飾りたい文章

私は長年、書かれたものを読んで重要な語句、自分が真似のできない表現・文章に出会うとアンダーラインを引いてきた。しかし、今日は引けない文章に出逢った。感動・感銘どころではない。しゃべりや文章では表現できない。まさに感覚でしかこの思いは伝えられない。自分が長年思い悩んできたことを意味のある語句・文章で代弁してくれたものに遭遇したからである。こんな文章の読み方をしたのは生来、初めてであろう。文学は奥深い。文学は人間の能力に限りがないことを証明してくれているように思える。……思えるのではなく限りが無いのだ。限りを設けるから限界ができるのだ。限りを設けなきゃいいんだ。黒田夏子さんの『朝日新聞』の記事を読んでそう悟った。(二〇一三年一月二十一日、火曜日)

78. 野心

文章を書くことに興味を覚え、毎日のように短い文章をPCへ入力している。我ながら、なかなかいい作品が出来たとうぬぼれに浸ることもある。超短篇ではあるが、どこかの文学賞へ投稿でもしてみようか、と冒険心を起こし、図書館やネットで探索を試してみた。

『群像』四〇〇字詰原稿用紙、七十枚以上二五〇枚以内。

『小説新潮』四〇〇字詰原稿用紙、二五〇枚以内。

この枚数、文字数かな？　とうてい無理だ、と潔くあきらめた。それでも自作の作品数が増えてくると、往生際が悪く、なお超短篇の受け入れ先はないものかと思案している。(二〇一三年一月三十一日、木曜日)

79. 手帳は語る

記憶は定かではないが、生まれて始めて手帳なるものをこの一年間使った。使ったというよりも持ち歩いた、が適切な表現かもしれない。中学、高校時代には学校から与えられた生徒手帳なるものを所持していたが。

自分で金を払って買ったのも始めての体験であった。手帳ごとときと見下して店に入ったが、立派なものには目が飛び出すほどの値段がついている。きつと、こんな高価なものを買う人は後生

大事に保管しておくのであろう、と私は手に取ることもなく、身の丈に会うものを物色した。小さい、軽い、安いのでCKYである。ずばり、税込み一〇五円の代物を購入した。

もちろんスケジュールをメモするために手帳は持ったのであるが、まだまだ手帳に頼らずとも記憶力は落ちていない。主な行動範囲が自宅と大学の研究室である私にとってスケジュールは両所の壁にかけてあるカレンダーに記入しておけば十分である。毎朝、壁に目をやることで用は足りる。

そもそも手帳を持つことになったのは学科長という職を命じられたからである。好んでこの職に就いたわけではない。投票という強行手段によって選出されてしまったのである。わが道を行くタイプの私には人を束ねる能力も興味もないし、お手当の数倍以上の雑務と責任がともなうものなので、本来、好きではない。

この職を解かれれば、きつと再び手帳を持つこともないであろう。会議への出席、学内行事、学生への面接指導など、欠かすとお叱りを受けたり、時間の再調整が難しい件が幾つかあるので、用心のために持つことにしたままである。

この一年間で私は、手帳とは自分ではなく、他人の都合のために持ち歩くものであることを理解した。恐らく、偉い人間にとって手帳は自分の時間管理のために所持するものなのであろう。これが偉人と凡人との顕著な差であろうと思う。

さて、一年間が過ぎようとしているので手帳を買い換えなければならない。役職の任期はもう一年残っている。捨てる前に、手元の手帳を開いてみると、よくもまあ、これだけ会議をこなしたものだど驚かされた。一カ月のうちに三回という月はさらにあり、最大六回も開催されている月もあった。一日のうちに三つの会議をこなした月も幾月かある。会議への出席の前後、会議用の資料の作成、コピーなどを考えれば莫大な時間が浪費されている。

振り返って会議を仕分けしてみると、有益な議論がされた会議、不用だった会議まで様々である。まるで集まって何かを話し合っていると、安心感を得るという印象すら浮かぶ。こうなれば会議も中毒である。毎回、しきりに発言する教員がいるかとおもえば、私のようにむつりうもん(右門?)を決め込み定足数を満たす要員の役回りしかしない教員など二極化しているようだ。むつりうもんでは駄目で、もつと積極的に意見を述べよ、という声が天から聴こえてきそうである。

改めて自分でも感心したが、絶対に避けて通れない会議の日時は赤のボールペンで記入されている。見落とさないようにという真剣みを感じる。工夫してたんだなあ、と思う。

この手帳の余命は後一カ月である。それでも来月には三回の会議が予定されている。まだ捨てるわけにはいかない。(二〇一三年二月二十三日、土曜日)

(了)